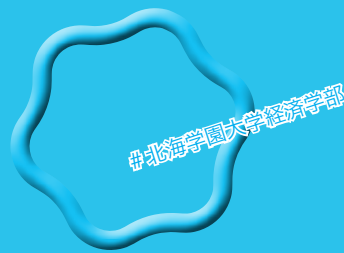


地域研修報告書 2023



Hokkai-gakuen University



1 …………… 2023年度『地域研修報告書』の発行にあたって

2・3 ……… 地域研修1年間の流れ・地域研修履修者数と実施ゼミ数・2023年度研修地一覧

4~39 …… 地域研修ゼミ報告 (2023年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ)

4	1部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ 文化財のオンラインデータベース化と観光地図づくり 研修地/函館市		22	2部西村ゼミ・濱田ゼミⅠ・Ⅱ合同研修 豊浦町の移住政策と空き家対策 — 空き家と残置物の調査 研修地/豊浦町	 
5	2部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ GISを用いた公園設備情報の収集と配置の特徴に関する考案 研修地/室蘭市		24	1部平野ゼミⅠ・Ⅱ・2部平野ゼミⅠ・Ⅱ 札幌市におけるフェアトレード活動と課題 研修地/札幌市	
6	1部上園ゼミⅠ 北海道豊富町の持続可能な産業と地域づくり 研修地/豊富町		26	1部藤田ゼミⅠ 京都観光におけるオーバーツーリズムの実態 研修地/京都府京都市・亀岡市	
7	1部上園ゼミⅡ 北海道ニセコ町の持続可能な地域づくり 研修地/ニセコ町		27	1部藤田ゼミⅡ 路線バスの需要喚起を目的とした路線バスツアープランの作成 研修地/石狩市	
8	2部上園ゼミⅠ・Ⅱ 余市エコビレッジ活動と持続可能な観光 研修地/余市町		28	2部藤田ゼミⅠ・Ⅱ 沿線地域から見る宗谷線の観光利用の推進 研修地/豊富町・幌延町・美深町	
9	1部内田ゼミⅠ・Ⅱ 芽室町上美生地区のまちづくりの現状と課題 研修地/芽室町		29	1部古林ゼミⅠ 火山との共存 研修地/洞爺湖町	
10	2部内田ゼミⅠ・Ⅱ 網走市のまちづくりの現状と課題 研修地/網走市		30	1部古林ゼミⅡ 洞爺湖町観光の問題点と展望 研修地/洞爺湖町	
11	1部大貝ゼミⅠ 浜中町経済の活性化策を考える 研修地/浜中町		31	2部古林ゼミⅠ・Ⅱ 野生生物との共存 研修地/斜里町	
12	1部大貝ゼミⅡ 「オール山形」の酒づくりから日本酒の可能性を考える 研修地/山形県山形市・東根市・村山市・西川町・酒田市・河北町		32	1部水野ゼミⅠ・Ⅱ 朝鮮人強制労働の痕跡を訪ねる研修 研修地/幌加内町朱鞠内	
13	2部大貝ゼミⅡ Re-designによるビジネスで地域課題を解決する経営を学ぶ 研修地/北見市・網走市・斜里町・大空町・遠軽町		33	1部水野谷ゼミⅠ・Ⅱ 食品ロス削減の現状と課題—旭川市の事例をふまえて 研修地/旭川市	
14	1部・2部川村ゼミⅠ・Ⅱ 学生アルバイトとワークルール 労働問題解決手段としての労働組合 研修地/札幌市		34	2部水野谷ゼミⅡ 津波避難場所における収容人数の検証 研修地/釧路町	
16	1部佐藤ゼミⅠ コープさっぽろが行うSDGs実践についての学習 研修地/江別市・石狩市・札幌市		35	1部宮入ゼミⅠ・Ⅱ 大規模畑作経営の現状とこれから 研修地/本別町	
17	1部佐藤ゼミⅡ 協同組合のSDGs活動と本学の取り組み 研修地/札幌市		36	2部宮入ゼミⅠ・Ⅱ 北海道稲作の現状と米販売戦略の方向 — 上川中央部を事例に — 研修地/旭川市・鷹栖町	
18	1部牛久ゼミⅡ 阿寒におけるアイヌ民族の暮らしと将来の課題 研修地/釧路市阿寒町		37	1部山田ゼミⅠ 更別村スーパービレッジ政策の課題の調査 研修地/更別村	
19	1部西村ゼミⅠ・Ⅱ 浦幌班 「多世代が幸福に暮らせる持続可能な地域づくり」の実証実験 研修地/浦幌町		38	1部山田ゼミⅡ 地域課題に対するDX化の実情と課題の調査 研修地/京都府京都市・大阪府枚方市	
20	1部西村ゼミⅠ・Ⅱ 阪神班 公民連携による公園を核とした賑わい創出とエリア再生 研修地/大阪府大阪市・兵庫県神戸市		39	2部山田ゼミⅠ・Ⅱ 地域コネクテッドを目指すサツドラの戦略を調査 研修地/札幌市	
21	1部濱田ゼミⅠ・Ⅱ 産学官連携による着地型観光の提案の取組 研修地/沼田町				

40 …………… 地域研修報告会

2023年度

『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部長 石井 健



地域研修は地方自治体、民間企業、非営利団体など、地域のさまざまな関係者をたずねてその活動に触れ、学ぶ科目です。地域経済学科設置とともに始まったこの科目は今年度で20回目を迎え、経済学部を代表する科目となっています。活動単位はゼミナールと同じで、夏休みに現地研修(フィールドワーク)を行い、それに先立つ事前学習と、研修後の成果のまとめと地域研修報告会での発表から構成されています。フィールドワークを中心とした科目は、座学でえられた理論や知識を肌感覚で捉えた現実の人びとの営みや社会のあり方とすりあわせ、再び言語化して知へと回収していく重要な機会です。受講する学生にとっては大学生活においてもっとも貴重な体験の時間となることでしょう。

そうした意味づけをもつ地域研修ですが、5月連休明けにコロナに関する規制が全面解除された今年度は、活動を本格的に再開することとなりました。北海道とは思えないほど異常に暑かった夏休みに予定どおりに現地研修を完了し、年末の「地域研修報告会」の開催と、今回の報告書発行にこぎ着けることができました。これもひとえにご協力いただいたみなさまのお陰と存じます。心から感謝申し上げます。

この地域研修報告書には、深刻な気候危機と人口減少が進む研修対象地域の実態と、研修に真剣に取り組む学生たちの様子があますところなく記録されています。この報告書を手にとったみなさん、是非とも最後まで読み通しいただき、学生諸君の活躍ぶりをご覧ください。

そして、この報告書をきっかけに地域研修に興味を抱いたみなさん、次の参加をお待ちしております。



地域研修1年間の流れ

地域研修は夏休みに行われる現地研修と、事前学習・事後学習・報告会でのプレゼンテーションから構成されます。教室での経済学・地域経済学関連の講義から学んだことと、地域のリアルな実態を結びつけて理解するために、複合的な要素から構成した実践的な科目です。

4月 ● 地域研修ガイダンス

地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、自ら収集した資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 ● 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では自治体・関連団体・企業などからのヒアリング、施設見学、アンケート等の実態調査、フィールドワーク、などを行います。

10月 ● 事後学習

ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめます。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行います。

12月 ● 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

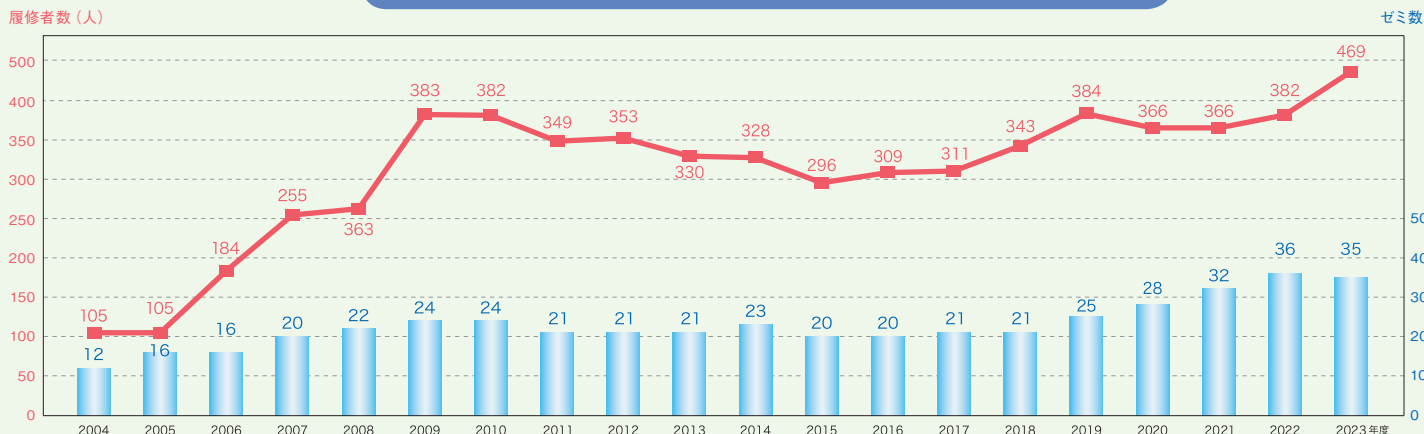
3月 ● 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。



①～⑤各ゼミによる現地研修。⑥現地での振り返り。⑦うらほろ特産品フェアを札幌子カホで開催（1部西村ゼミ）。⑧事後学習・報告会準備。

地域研修履修者数と実施ゼミ数



研修地一覧



宗谷総合振興局管内

- A 豊富町 上園ゼミⅠ
2部 藤田ゼミⅠ・Ⅱ
- B 幌延町 2部 藤田ゼミⅠ・Ⅱ

- T 札幌市 川村ゼミⅠ・Ⅱ
2部 川村ゼミⅠ・Ⅱ 佐藤ゼミⅠ
佐藤ゼミⅡ 平野ゼミⅠ・Ⅱ
2部 平野ゼミⅠ・Ⅱ
2部 山田ゼミⅠ・Ⅱ

石狩振興局管内

- U 石狩市 佐藤ゼミⅠ
藤田ゼミⅡ
- V 江別市 佐藤ゼミⅠ

上川総合振興局管内

- C 美深町 2部 藤田ゼミⅠ・Ⅱ
- D 幌加内町 水野ゼミⅠ・Ⅱ
- E 鷹栖町 2部 宮入ゼミⅠ・Ⅱ
- F 旭川市 水野谷ゼミⅠ・Ⅱ
2部 宮入ゼミⅠ・Ⅱ

空知総合振興局管内

- G 沼田町 濱田ゼミⅠ・Ⅱ

オホーツク総合振興局管内

- H 遠軽町 2部 大貝ゼミⅠ・Ⅱ
- I 北見市 2部 大貝ゼミⅡ
- J 網走市 2部 内田ゼミⅠ・Ⅱ
2部 大貝ゼミⅡ
- K 大空町 2部 大貝ゼミⅡ
- L 斜里町 2部 大貝ゼミⅡ
2部 古林ゼミⅠ・Ⅱ

釧路総合振興局管内

- M 浜中町 大貝ゼミⅠ
- N 釧路町 2部 水野谷ゼミⅡ
- O 釧路市 牛久ゼミⅡ

十勝総合振興局管内

- P 浦幌町 西村ゼミⅠ・Ⅱ
- Q 本別町 宮入ゼミⅠ・Ⅱ
- R 芽室町 内田ゼミⅠ・Ⅱ
- S 更別村 山田ゼミⅠ

後志総合振興局管内

- W 余市町 2部 上園ゼミⅠ・Ⅱ
- X 二セコ町 上園ゼミⅡ

胆振総合振興局管内

- Y 豊浦町 2部 西村ゼミⅠ・Ⅱ
2部 濱田ゼミⅠ・Ⅱ

Z 洞爺湖町

- 古林ゼミⅠ
- 古林ゼミⅡ

AA室蘭市

- 2部 浅妻ゼミⅠ・Ⅱ

渡島総合振興局管内

- AB 函館市 浅妻ゼミⅠ・Ⅱ

山形県 酒田市 大貝ゼミⅡ

山形県 山形市・東根市・村山市・
西川町・河北町 大貝ゼミⅡ

京都府 京都市
藤田ゼミⅠ 山田ゼミⅡ

京都府 亀岡市 藤田ゼミⅠ

兵庫県 神戸市
西村ゼミⅠ・Ⅱ

大阪府 枚方市
山田ゼミⅡ

大阪府 大阪市
西村ゼミⅠ・Ⅱ

▶▶ 経済学部webサイトで、これ
までの研修地や参加者数を、
地図化して掲載しています。



<https://econ.hgu.jp/program/field-work.html>



1部 浅妻裕ゼミ I・II

参加学生数 29名



浅妻 裕
経済学科
教授



函館市地域交流まちづくりセンターにて

文化財のオンラインデータベース化と 観光地図づくり

研修地：函館市

●研修目的

函館市では、石碑を含めた様々な文化財が観光のコンテンツとなっている。これらは観光地図でも活用されているが、紙ベースが中心で、掲載情報量や、利用時の物理的な制約がある。これをデジタル化することの意義は大きく、フィールドワークによる情報収集と、これらを用いた観光地図作りを行う。

研修先・日程

- 9月14日 函館市教育委員会（函館市の文化財に関する講演）
五稜郭付近でのフィールドワーク
- 9月15日 函館市街地でのフィールドワーク
- 9月16日 函館市街地でのフィールドワーク

写真①歴史資料の解説。②函館市地域交流まちづくりセンターにて講演を聞く。③調査に用いたGIS webアプリケーション画面。線が調査ルート、点が調査地点、面が各班の調査エリアを示す（一部データは調査時点のものから変更している）。④石像前にて。⑤様々な観光地図。⑥石碑事例。



●総括

函館市は地域の歴史アーカイブが非常に豊富であり、それらのデジタル化を進めている。とはいえ、膨大な資料を系統的にデータベース化することは簡単ではない。石碑をはじめとした文化財については、位置情報を手掛かりに整理している段階である（函館市教育委員会奥野進様のご講演「地域資料のデジタル化 石碑情報を中心に」による）。今回の研修では、GIS(地理情報システム)webアプリケーションを用いて、フィールドワークによる石碑を中心とした文化財情報の収集と、複数のテーマを持つ観光地図作りを実践した。全体を9つの班に分け、エリアごとに情報収集を行ったが、エリア内のすべての道路を歩き、漏れなく情報把握するため、「Fieldmaps」アプリにより軌跡を取った。また、位置、写真、建立年、周辺環境等といった情報を「Survey123」により取得し、GISデータベースに格納した。上記はすべてスマートフォンによる作業である。事後学習において、このデータを用い、「旧町名碑探索」「寺院と石碑に残された戦争に歴史」「跡地からめぐる函館の歴史」等の観光地図を「Storymap」アプリにより作成した。今後、この公開の方法についての検討を深める予定である。

学生研修記



戸村 涉
経済学科3年
北海高校出身

石碑という新しい観光資源

今回の地域研修では函館を訪れ、石碑の調査を行いました。石碑を調査していく中でその土地の歴史や時代背景などたくさんの情報を1つの石碑から読み取ることができ、研究のしがいがありました。

現地ではフィールドワークをしていく中で観光地となっている場所には石碑があるという共通点に気づきました。本来であれば観光地の方に目を向けてしまいがちですが、石碑も合わせて見ることで学びや視点が変わり、また違ったおもしろさを引き出すコンテンツであると感じました。さらに、観光地だけではなく道中にも旧町名碑や歌碑など様々な種類の石碑が混在しており、時代を遡って土地の繋がりや雰囲気も知ることが出来ます。このように私は歴史を後世に伝えることができる石碑に可能性を感じ、函館をさらに活性化させる新たな観光資源として注目すべきものだと思いました。



三島 真央
経済学科3年
青森高校出身

フィールドワークを通じた観光マップ作り

今回の地域研修では函館市の石碑を巡りマップ作りを行いました。函館市史を観光に活かす上で、かたちのない地域資源である歴史は石碑として目に見える形で残っているものがあり、実際にエリアを回ってみると様々な種類の石碑があることが分かりました。その中で、石碑を墓碑と見るか、記念碑と見るか、観光碑と見るかなどマップ作りをしていく中でも方向性の決定が重要であることを学びました。

また、観光時にはシビコライスというローカルご飯を食べたり、ラッキーピエロで友だちとお揃いのパーカーを買ったりなど函館市を満喫しました。

事後学習では報告会に向けてストーリーマップを使い石碑のマップ作りを進めました。ストーリーマップではポイントをクリックすると調査した石碑の概要が出てきたり、ジャンルごとに分けてまとめたルートが表示されたりと興味深いアプリに触れることのできる貴重な体験となりました。私たちが実際に歩き回って調査し、学んだことを存分に生かしたマップが作成できたと思います。



2部 浅妻裕ゼミ I・II

参加学生数 13名



浅妻 裕
経済学科
教授



入江運動公園にて

GISを用いた公園設備情報の収集と配置の特徴に関する考察

研修地：室蘭市

●研修目的

室蘭市では、長期的に人口が減少する中で、公園設備の効率的な管理や再配置が課題となっている。GISを用いたデータベースを構築しているが、膨大な設備があるために情報が欠落している箇所もある。今回の研修ではGISwebアプリを用いて、これらの情報を収集し、学生視点でインフラの配置やその状態について考察を深めた。

研修先・日程

- 10月9日 室蘭市企画財政部企画課川口陽海様のご講演（室蘭市の概況や調査内容・手法について）
祝津公園展望台
入江運動公園（予備調査）
地球岬展望台
- 10月10日 4つの班に分かれて市内の公園設備を調査

写真①室蘭市役所に講演を聞く。②調査画面サンプル。③旧祝津交通公園。④地球岬。⑤白鳥大橋を望む。



鈴木 恵斗
経済学科2年
北海道札幌高校出身



武田 燎
経済学科2年
網走南ヶ丘高校出身

●総括

自治体によって整備された公園設備は、場所やスペック、状態について公的に管理され、市民からの問い合わせや破損等があった場合に行政職員が対応できるようになっている。しかしながら、高度成長期に整備されたものは老朽化が進んでいたり、年齢層の変動に対応した適切な設備配置ではなかったりする場合もある。さらに公園自体の再配置も課題となっている。今回、室蘭市から提供されたGISwebアプリケーションを用いて、学生が4つの班に分かれて調査対象公園の現地調査を実施し、すべての設備の写真と位置情報をデータベースに格納する作業（研修）を行った。設備の状態についても、可能な範囲で目視でのチェックを行った。この研修を通じて、第一に、公園には設置されている場所によって、役割が異なっていることが判明した。遊具が集中的に設置され広域的なエリアからの子供の来訪を想定した公園、住宅地の中で散歩等に利用される公園、等である。第2に国勢調査の人口データと合わせてみることで、人口変動と公園施設の関係性について、理解を深めることが出来た。高齢化率が高い地域では比較的ベンチの設置が進んでいるのではないかと、遊具について全体的に老朽化や撤去が進んでおり、高齢化に対応した施設配置に移行しているのではないかと、といったことである。再配置の在り方については今後の検討課題となった。

学生研修記

室蘭市における公園の役割

今回の地域研修では、地理情報システムのGISを用いて室蘭市内の公園に設置されている施設（ベンチや遊具、フェンス等）の設置数や状態を調査した。調査結果は、室蘭市内の公園にはベンチが多く設置されており、高齢化率が高い地域ほどベンチの設置数が多い傾向にあり、状態も綺麗なものが多かった。逆に遊具は、公共施設や室蘭駅などから近い入江運動公園には、複数設置されていたが、それ以外の公園ではあまり多くは見られなく、老朽化が進んでいるものが多かった。これらのことから室蘭市には、若者向けの公園ではなく、高齢者向けの休憩スペースとしての公園が多く設置されていることがわかった。今回ゼミで地域研修を行ったのは初めてだったため、事前学習等でも不安なこともあったが、研修当日は、室蘭市の職員の方から話を聞くことができたり、先輩方と協力しながら自分達の足で自然と触れ合いながら公園内を調査したことは刺激的で、有意義な時間だった。

ニーズに合わせた公園づくり

私たちは昨年度と同様に室蘭市を訪れた。今回の目的は「室蘭市の公園内の施設やインフラの老朽化をArcGISというアプリを用いて写真を撮り地理情報を収集、その情報から室蘭市の現状を知る」ことであった。訪問する前に事前学習として人口や産業、観光名所などの特色を学んだ。そこでは駅周辺はコンパクトシティづくりを推進していることや室蘭市は崖が多いため自然豊かな街並みを一望できるスポットが多くあることを知った。調査を行う際には市役所の方と一緒にいった。それぞれの公園はそれぞれの役割に応じた設備が設置されていることや、古い公園であっても行政のインフラ管理が滞りなく継続されていることがわかった。今回の調査により、公園と周辺の人口構成等の地域社会との関係性や、インフラ管理の効率化の手法について理解を深めることが出来た。



1部 上園昌武ゼミⅠ

参加学生数 14名



上園 昌武
経済学科
教授



豊富町長と職員の皆さんと一緒に

北海道豊富町の持続可能な産業と地域づくり

研修地：豊富町

●研修目的

豊富町は、過疎高齢化問題に直面しているが、それを克服していくためには、どのように持続可能な産業と地域づくりを展開していけば良いのかを問題意識をもって調査に取り組んだ。調査テーマを4つに分け(エネルギー、酪農、観光、教育・子育て)、それぞれに担当を置いた。

研修先・日程

- 8月20日 川島旅館(観光業と地域づくりの取り組みのヒアリング)
- 8月21日 北海道豊富高校(「北海道のSDGsについて」生徒とワークショップ)、豊富町立兜沼小中学校(生徒との交流、餅カフェわが家(昼食、「湯治移住者の生活と食堂経営」の講演)、サロベツ湿原(現地ガイド同伴のツアー)、豊富温泉(入浴)
- 8月22日 風力発電と送電・蓄電施設(電力事業のヒアリングと視察)、川島旅館(昼食)、NPO ミラココ(子育てサークル活動のヒアリング)、酪農家・北崎農園(視察、農業体験)
- 8月23日 豊富町定住支援センター(河田豊富町長のご講演、町政のヒアリング)、大規模草場で酪農の視察

●総括

本研修では、エネルギーや酪農・観光という産業だけではなく、教育や子育てという生活にも着目して幅広い内容を調査した。参加学生は、事前学習と質問票の作成、調査時の質疑応答と調査記録の作成、調査後の報告書作成とプレゼンという一連の調査方法を習得できたはずである。プレゼン報告は、経済学部報告会(12/17)だけではなく、他大学との合同ゼミ(オンライン)を1回実施し(12/19)、刺激のある学生研究の交流を行うことができた。また、地元の小中高校生との交流を行った。4日間一緒に過ごすことで学生同士が仲良くなったことも大きな成果である。

課題としては、現状把握に時間がかかったため、関連の学説や理論など先行研究を十分にサーベイできず、より深い考察を行えなかったことがあげられる。次年度の地域研修では、学術研究に近づけた研修を実施したいと考えている。

最後に、本研修では豊富町役場、事業者や住民の皆さんに大変お世話になった。厚く御礼申し上げます。

学生研修記



中川 正基
経済学科2年
小樽潮陵高校出身



奥田 等子
経済学科2年
遠斐女子高校出身

北海道の隠れた魅力を持つ町、豊富町

地域研修を通して、豊富町の現地ですら分らない魅力を感じることができた。役場の招待によるバーベキュー、希少な鹿肉を使ったタコライス、カヤック体験など、この上ない最高の思い出になった。

サロベツ湿原では植生の変化を学び、四季折々の景色を見る事ができる事を学んだ。豊富温泉では世界でも2カ所しかないアトピー性皮膚炎に効く貴重な湯治ができる温泉であることを実際に入浴して感じた。また、豊富町は酪農が有名であり、北海道のセイコーマートにブランド商品として置かれている。私たちは酪農家へ視察に行き、牛の乳搾りを体験した。新鮮な豊富牛乳の自作アイスで頂戴し、濃厚で他では味わうことのできない美味さだった。しかし、視察した酪農家では、1日中牛の体調管理をし、睡眠時間を削りながら仕事をする大変さや、後継ぎ不足の問題などが山積している。豊富町の隠れた魅力や現状、課題を知ることができて充実した研修となった。

自然豊かな豊富町の地域性を活かした魅力

私が初めて豊富町を訪れて感じたことは、自然が豊富で魅力的な街であるということです。緑が多く自然豊かでのびのびと過ごすことができる場所が4日間の中でたくさん見つかりました。

豊富高校は、全校生徒の人数は少ないかもしれませんが、制服や通学費の支援など教育の部分でもたくさんの工夫がされていました。さらに子育てサークルのサロママの活動について話を聞くと、地域性を活かした、湿原さんぽやカヤック体験、キャンプなど豊富町ならではの楽しい活動が多かったです。また、参加者の多くは豊富町に移住してきた人でした。事前学習した以外にも、豊富町に住みたくなるたくさんの理由があるのだと推察しました。さらに高校や観光などは宣伝方法や新たなプロジェクトなどを実践するとより活性化につながると思います。今回私は教育や子育てを中心に話を聞く機会が多かったので、別の視点からも豊富町の魅力について知りたいと思います。



写真①役場担当者とのヒアリング。②サロベツ湿原でカヤック体験。③豊富温泉の天然ガス施設。④豊富町の風力発電施設。⑤ミラココの保育現場。⑥牧場での搾乳体験。⑦バーベキューパーティ。⑧カレーライスづくりに挑戦。

1部 上園昌武ゼミⅡ

参加学生数 14名



上園 昌武
経済学科
教授



大湯沼を背景に

北海道ニセコ町の持続可能な地域づくり

研修地：ニセコ町

●研修目的

ニセコ町は、「SDGs 未来都市」に選定され、省エネ対策（建築物の断熱化）を促進している。また、スキーやラフティングなどを目的に国内外から多くの観光客が訪れている。本研修では調査テーマを3つに設定し（SDGs、観光、子育て）、持続可能な地域づくりの可能性を考察した。

研修先・日程

- 9月18日 ニセコ道の駅の視察、
奥土農場で農園経営と石窯パンの講演
- 9月19日 青空自主保育ばんぼろの視察、
温泉ソムリエ・佐藤努さんの講演と温泉視察、
ニセコ未来サポート隊・高井裕子さんの講演
- 9月20日 ニセコ町役場でSDGs未来都市の講演、
SDGs街区・ニセコミライの講演と現地視察

写真①奥土農場にて有機農業のヒアリング。②奥土農場のパン売り場。③青空自主保育ばんぼろの活動。④大沼湯での視察。⑤役場にてSDGs未来都市の講演。⑥ニセコミライの現地視察。⑦パーベキューで懇親を深める。



●総括

本研修では、有機農業や温泉、牧場などを視察し、サステナブルツーリズムという観光や、子育てや教育などを事例にして持続可能な地域づくりの実態と課題を調査した。参加学生は、昨年の地域研修1（豊富町）の経験を活かして、事前学習と質問票の作成、調査時の質疑応答と調査記録の作成、調査後の報告書作成とプレゼンという一連の調査方法を習得できたはずである。また、3日間一緒に過ごすことで学生同士が仲良くなったことも成果である。そして、プレゼン報告は他大学との合同ゼミ（オンライン）でも実施し（12/16）、刺激のある学生研究の交流を行うことができた。

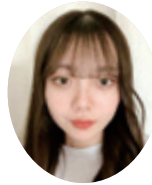
課題としては、現状把握に時間がかかったため、関連の学説や理論など先行研究を十分にサーベイできず、より深い考察を行えなかったことがあげられる。これから卒業研究にとりくむ人には、研究の問いと答えを見つけ出す難しさと楽しさを経験して欲しい。最後に、ニセコ町役場や事業者・住民の方々に大変お世話になった。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。



高橋牧場にて観光業の話を開く

学生研修記

阿部 由愛
経済学科3年
岩見沢緑陵高校出身



豊かな自然を活かしたニセコ町の農業と観光業

ニセコ町を訪れてみて、役場の方からのお話から改めて、豊かな自然を活かし、農業と観光業に力を入れていることを知ることができた。

SDGsの取り組みも積極的に行われており、住民にとって快適な住環境づくりや多様性と対話が生まれるまちづくりをめざして街の開発が行われている現場を実際に見て回ることができてとても勉強になった。

また、ニセコ町の子どもたちと触れ合っ、都会ではできない自然の中で自由にのびのびと遊べる野外保育の良さも知ることができた。そのほかにも、高橋牧場では、失敗を繰り返しながら課題を見つけ解決していく大切さを教わり、大湯沼ではニセコ町の温泉の歴史も学ぶことができて、とても良い経験だった。

佐々木 俊哉
経済学科3年
東京大学教育学部附属
高校出身



ニセコ町と豊かな自然の中の観光と農業

今回、ニセコ町を訪れ、様々な方々からお話しを伺う中で、町内出身者も町外からの移住者もニセコの地を愛し誇りを持っている人が多くいるのだと感じました。また、ニセコ町はスキーリゾートを始めとする外国人に人気のある観光地という印象が強い地域でしたが、農業や酪農も盛んな地域であるということが分かりました。そして、その観光と農業といった産業を支えるものは豊かな自然や景観であり、このことから環境や持続可能な社会への意識が高い住民が多く、行政も早くからこの問題に意欲的に取り組んでいることを知ることができました。その一方で、今回宿泊したホテルは従業員不足でレストラン営業が休止しており、コロナ禍が終わりを迎えつつある現在もまだ以前の日常は戻っていないという厳しい現状も実感しました。

2部 上園昌武ゼミ I・II

参加学生数7名



上園 昌武
経済学科
教授



ゼミ打ち上げコンパにて

余市エコビレッジ活動と持続可能な観光

研修地：余市町

●研修目的

余市町は、典型的な通過型観光地である。余市エコビレッジは、体験型観光であり、持続可能な観光としても注目される。本研修では、エコビレッジ活動を体験し、ヒアリングによって持続可能な観光の実態を把握することを目的とした。また、大型風力発電の建設計画が地域社会に与える影響を住民交流の場で考察した。

研修先・日程

- 9月13日 余市エコビレッジで農業体験
余市住民との意見交換会「余市の脱炭素の地域づくりに向けて」へ参加
- 9月14日 余市エコビレッジ代表・坂本純科氏へのヒアリング
余市・仁木町での観光視察（フルーツ農園、温泉、レストラン）

写真①余市エコビレッジの農園。②農場の堆肥の説明を受ける。③ぶどう農園。④ぶどう農園での草刈り。⑤農作業体験。⑥余市エコビレッジ代表坂本純科氏。⑦タイニーハウス。⑧ヒアリングの様子。



●総括

エコビレッジとは、「住民が互いに支えあう仕組み」と「環境に負荷の少ない暮らし方」を求め人びとが意識的に創るコミュニティのことである。エコビレッジには4つの特徴がある。①持続可能な食料自給、②持続可能なエネルギー、③持続可能な経済、④持続可能なコミュニティ形成である。また、余市町には大型風力発電の建設計画が進められていたが、住民からの反対運動によって中止となった。脱炭素社会への移行では、風力発電の増設が欠かせないが、地域社会との紛争を回避していくためにはどうすべきかが大きな課題である。そこで本研修では、持続可能性をキーワードに観光とエネルギーの2つをテーマにしてヒアリングと視察に取り組んだ。

本研修によって、参加学生は、事前学習、調査時の質疑応答と調査記録の作成、調査後の報告書作成とプレゼンという一連の調査方法を習得できたことが成果である。今回は初めて地域研修に参加した2年生が多く、調査の楽しさと難しさを体感できたと思う。また、2日間一緒に過ごすことで学生同士が仲良くなったことも成果である。課題としては、現状把握に時間がかかったため、関連の学説や理論など先行研究を十分にサーベイできず、より深い考察を行えなかったことがあげられる。

学生研修記



柴田 温大
経済学科2年
北海学園札幌高校出身

地域づくりでの合意形成の重要性

今回の地域研修で学んだことは、エネルギー問題に取り組むときに個人や数人での働きでは限界があるため、地域全体で問題に取り組むことが重要だということです。その中でも合意形成がとても大切で難しいのだと理解しました。無農薬で作物を育てることをあまりよく思わない周辺の農家さんたちと何度も交流をすることで認められるようになったという話は印象に残っています。他にも、ソーラーパネルの設置や電線を通すにも莫大な費用がかかるため、地域が協力して取り組む必要があるということなど、現地で生の声を聴くことで学ぶことができました。

気づいたこととしては、エコビレッジは我慢をしてエコをしているわけではないということです。私たちは二日間しか滞在しませんでした、不自由を感じませんでした。しかし、季節や収穫状況によって食べるものを決め、電気がないときは早く寝るなどの工夫に気づきました。どれも新鮮な体験だったので、地域研修のすべてが楽しかったです。



三木 歩夢
経済学科2年
札幌稲雲高校出身

地域住民と作り上げるエコビレッジ

エコビレッジでは、草むしりやコンポストトイレ、Tシャツの切れ端で皿を拭くなど、貴重な体験ができました。その中で1番記憶に残っているのが、1日目夜の地域住民との交流会です。余市・小樽風力発電計画の問題や脱炭素地域づくりについての講演の後、参加者から初歩的で素朴な疑問などが飛び交いました。例えば、北海道電力の送電線を借りる場合の金額などの専門的な話があり、聞くだけでも知識を深めることができました。また、議論を聞いていると、色々な立場の人がいることもわかり、日常にはない有意義な時間を過ごせました。

この話し合いを通して重要に感じたのが、エネルギー問題に取り組むには、個人ではどうしても限界があることです。そのためには、地域での連携が必要であり、今回のような合意形成する場が大切だと実感しました。

1部 内田和浩ゼミ I・II

参加学生数 11 名



内田 和浩
地域経済学科
教授



ゼミ室にて

芽室町上美生地区のまちづくりの現状と課題

研修地：芽室町

● 研修目的

ゼミナール I・II で前期に学んだ量的調査法を用いて、昨年度まちづくりのリーダーのライフストーリー調査を行った芽室町上美生地区の皆さんを対象に、後期にまちづくりに関するアンケート調査（悉皆）を行なうため、本地域研修では芽室町上美生地区のまちづくりの現状と課題を現地で学ぶとともに、調査票づくりを行う。

研修先・日程

- 9月4日 芽室町のまちづくりと上美生地区（芽室町役場魅力創造課）、上美生地区の梶澤農場を見学、ゼミ夕食懇親会（帯広市内）
- 9月5日 美生地区にある「ふるさと歴史館「ねんりん」」を見学、上美生地区内フィールドワーク、グループ学習①（芽室町上美生農村環境改善センター集会所）
- 9月6日 グループ学習②（芽室町上美生農村環境改善センター集会所）、中美生地区にある「新嵐山スカイパーク展望台」を見学

写真①②梶澤農場見学。③④聞き取り調査。
⑤懇親会。



● 総括

地域研修では、昨年度に引き続き芽室町上美生地区を訪問した。初日は、最初に芽室町役場を訪問し、魅力創造課の職員からお話しを伺った。手島旭町長にもご挨拶いただき、大変有意義な時間となった。その後、梶澤農場を見学させていただき、超大型の農機具に驚くとともに、上美生での農業の現状と課題について、芽室町議会議長でもある梶澤幸治氏からお話を伺った。夜は、ゼミ懇親会でゼミ生同志の交流を深めた。2日目は、美生地区にある「ふるさと歴史館「ねんりん」」を見学させていただいた後、上美生地区の市街地でフィールドワークを行った。そして、午後からは上美生農村環境改善センター集会所に地域の方々にお越しいただき、グループのテーマ毎に聞き取り調査を行った。3日日も、引き続き地域の方々に行き取り調査を行い、最後に中美生地区にある「新嵐山スカイパーク展望台」を見学した。

学生たちはこれらを通じて、上美生地区のまちづくりの現状と課題について、地域社会で実際に暮らす人々の視点に立って理解することが出来たと思う。後期のゼミでは、アンケート調査票を作成し、上美生地区の中学生以上の皆さんへの量的調査を実施することができた。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。



新嵐山スカイパーク展望台見学

学生研修記

熊野 英翔
地域経済学科 2年
札幌新川高校出身



地域研修を終えて

私たち内田ゼミは芽室町上美生地区を訪れ多くのことを学ぶことができました。地域に必要なもの、農業、学校という3つのグループに分かれフィールドワークや地域の方々にお話しをお聞きしました。その後は上美生地区の住民を対象としたアンケート調査を実施しました。今後はアンケートの結果から各項目と年代や仕事などとクロスさせ集計を行いどのような因果関係があるのかなどを考察していきたいと思っています。

今年は量的調査ということで、アンケート作りでは限られた質問量の中で自分たちが聞きたいことをいかにして聞いたり、回答者が答えやすいようなアンケートを作るため工夫や分析が必要でした。私が考えるに上美生地区には生活に必要最低限の施設しかないため、地域住民がどのように考えているのかはとても興味深いものがありました。今回の地域研修で心に残ったことは、リーダー的な存在の方が先頭となり、原動力となることで周りの住民を感化しみんなで協力することで、よりよいまちづくりを進めているのだなと思いました。

原田 悠里
地域経済学科 3年
釧路湖陵高校出身



取り組みと想いを知った地域研修

今年の地域研修は、昨年に引き続き芽室町上美生地区で調査を行いました。研修の目的は、住民へのアンケート調査票づくりに向けた予備調査です。実際に現地に行き、芽室町上美生地区について、昨年度とは異なる視点で学びました。

昨年度は、上美生地区の歴史やまちづくりの取り組みを学びました。今年度も同じ地域に行くことで、まちづくりへの熱意や考えも知る事ができ、貴重な時間でした。

上美生地区でのアンケート調査依頼をする際に、上美生地区協議会長とお話をしたことが印象に残っています。上美生地区では、ワークショップやアンケート調査を通して地域住民の意見を聞くまちづくりを行っています。多くの住民を巻き込む事へ難しさを感じている事を知りました。

後期授業で作成・実施しているアンケート調査を通して、今回学んだ取り組みや熱意が、地域にどの程度広がっているかを知り、上美生地区に還元できるような分析を行いたいです。

2部 内田和浩ゼミ I・II

参加学生数9名



内田 和浩

地域経済学科
教授



オホーツク文化交流センター・網走市立図書館にて

網走市のまちづくりの現状と課題

研修地：網走市

●研修目的

ゼミナール I・II で前期に学んだ量的調査法を用いて、網走市の市民の皆さんを対象に後期にまちづくりに関するアンケート調査を行なうため、本地域研修では網走市のまちづくりの現状と課題について現地で学ぶ。

研修先・日程

- 8月30日 網走市のまちづくりの現状と課題（網走市企画調整課）、オホーツク流水館見学、道の駅・商店街等を見学
- 8月31日 グループ別フィールドワーク（観光・商店街・農・漁業）、網走監獄博物館見学、網走郷土博物館見学、網走市役所北海学園大学OB会との懇親会
- 9月1日 オホーツク文化交流センター図書館でグループ別資料調査、能取湖サング草群落地見学

写真①オホーツク流水館。②③網走監獄博物館。④網走市企画調整課。⑤網走郷土博物館。⑥学園OBとの懇親会。⑦⑧能取湖サング草群落地。



●総括

地域研修では、初日に網走市役所を訪問し、企画調整課から「網走市のまちづくりの現状と課題」についてお話を伺った。その後、観光施設の見学としてオホーツク流水館、道の駅等を見学し、バスの中から商店街等の中心市街地を見学して、網走市の現状把握を行った。2日目は、グループ別フィールドワーク（観光・商店街・農・漁業）を行い、それぞれのテーマで実態調査を行った。その後、網走監獄博物館見学するとともに、網走郷土博物館を訪問して網走市の歴史や成り立ちについて学んだ。夜は、網走市役所の北海学園大学OB会の皆さんと懇親会を行い、市の仕事や学生時代の思い出話等、交流を深めた。

3日目は、グループ別に図書館で資料調査を行うとともに、能取湖のサング草群落地を見学した。学生たちはこれらを通じて、網走市のまちづくりの現状と課題について、地域社会で実際に暮らす人々の視点に立って理解することが出来たと思う。後期のゼミでは、アンケート調査票を作成し、網走市の高齢者大学を受講する皆さんへの量的調査を実施することができた。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。

学生研修記



鳥谷部 峻吏

地域経済学科2年
旭川永嶺高校出身



野村 優花

地域経済学科2年
二セコ高校出身

地域研修を終えて

私たちは、観光、商店街、農業・漁業の三つの観点から網走市の市民の皆様を対象にまちづくりに対するアンケート調査を行うため、網走市のまちづくりの現状と課題を調査しに行きました。一日目は網走市役所とオホーツク流水館、二日目は網走市観光協会道の駅観光案内所と流水硝子館と apt.4（商店街）と博物館網走監獄と網走市立郷土博物館、三日目はオホーツク文化交流センターと卯原内サング草群落地を訪問・見学しました。

特に印象深かったのは、網走市役所と網走観光協会道の駅観光案内所の職員の方のお話です。地域研修前の事前学習では見えてこなかったまちづくりの課題と方向性と戦略、観光の魅力や網走市やオホーツク地域にある観光関連施設が連携した取り組み、観光イベントと市民の関係性等について新たに知ることができました。

現在、アンケート結果の集計・分析の途中ですが、今後は分析結果から浮かび上がった課題やそれに対する解決策について考察していきたいです。

網走市の地域研修で学んだこと

今回私たちは、網走市のまちづくりについて、観光・商店街・農業と漁業の3グループに分かれて調査しました。

初日は市役所の企画調整課で、網走市のまちづくりの現状と課題についてお話を聞きました。まちづくりの方向性や目標など、網走市が取り組む内容を知ることができました。次の日にはグループごとに現地でフィールドワークをしました。私の農業・漁業グループでは実際に畑を見に行き、また、農作物の直売所で地元の方々に網走の農業の現状についてお話を聞くことができました。農業で人手不足が続いており、地元の農大生や外国人が担い手の一部になっていると聞き、学生も貴重な人材なんだと思いました。最終日には市内の図書館で文献調査をしました。過去の資料と最新の資料を比較して農業・漁業の変化を数字で見たり、写真などの資料を見たりしました。

地域研修を通して、特に網走市の農業の変化について学ぶことができました。

1部 大貝健二ゼミ I

参加学生数 11 名



大貝 健二
地域経済学科
教授



霧多布湿原にて

浜中町経済の活性化策を考える

研修地：浜中町

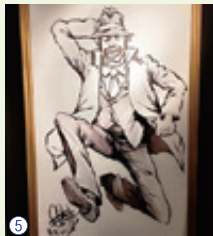
●研修目的

本研修では、2021年に浜中町地域企業振興基本条例を制定した浜中町を訪問し、町の基幹産業である一次産業（農業・水産業）の役割を踏まえつつ、いかに地域資源、地域中小企業を結び付けながら地域経済を活性化させるかを検討することを目的とした。

研修先・日程

- 8月23日 浜中町役場（企画財政課）、浜中漁協、旧茶内第一小学校
- 8月24日 浜中町役場（商工観光課）、風と土のナビタカ、タカナシ乳業 北海道工場
- 8月25日 観光スポットめぐり、浜中町農協

写真①浜中漁協。②風と土のナビタカ。③旧茶内第一小学校。④タカナシ乳業。⑤モンキーパンチの故郷。⑥霧多布湿原。⑦酪農技術センター。⑧浜中町農協。



●総括

本研修で明らかになったことは以下の諸点である。第1に、浜中町の基幹産業である水産業の現状である。主要な水産資源として昆布などがあるが、環境の変化に伴う漁獲量の低迷や担い手の高齢化などの問題があることがわかった。また、ウニの完全養殖を可能にしているが、他の水産物と同様に本州・大消費地へ出荷されることから地元に残らないことも学んだ点である。第2に、農業（酪農）に関しては、浜中農協が1970年代から乳をデータ管理し、品質を担保していたことがタカナシ乳業との関係構築に大きく寄与していることが分かった。さらに、道東の他地域とは異なり、家族経営でできる規模で酪農を展開している農家が多いことから、輸入飼料の価格高騰などの影響はほぼ受けていないことも学んだ。第3に、これらの基幹産業を浜中町の地域経済の活性化につなげていくか、については、観光などのツールを媒介として、産業間の障壁を取り除くこと（産業間の連携を図ること）が求められる。同時に官民の連携も求められるが、内発的な（自発的な）取り組みによって実現可能であると思われる。コミュニケーションの場として、廃校を活用することも有り得ると考えられる。

学生研修記



奥木 亮成
地域経済学科2年
札幌第一高校出身

地域研修で見た浜中町の課題

私たちは、浜中町における地域活性化とは何かというテーマで研修を行いました。浜中町は漁業と酪農業が盛んな町で、国内有数の収穫量を誇る昆布や、完全養殖に成功したウニ、データ管理に基づいた高品質な牛乳があります。さらに、観光資源として、霧多布湿原をはじめとする豊かな自然もあります。しかし、研修を通して、これらの魅力がうまく発信できていないという声をよく聞きました。

研修で様々な方から話を聞くなかで、行政と町民の間、漁業と酪農業の間に意識のずれ違いがあることが分かりました。このようなずれ違いが、町の魅力を発信できていない問題の原因となっていると感じました。そのため、町の分裂を解消することが、地域活性化に繋がっていくと考えています。

町の方々には浜中町に愛着を持って、様々な取り組みをしていると感じました。そのような方々と交流し、町について考えることはとても楽しく、良い経験になりました。

地域研修を通して学んだこと

地域研修は、浜中町の地域活性化をテーマに、浜中町で研修を行った。研修では浜中町の役場や、農協、漁協、タカナシ乳業などにヒアリング調査を行った。訪問先では、それぞれの産業に携わっている方々から現状の課題などについての話を聞いた。調査の結果、浜中町ではデータに基づいた酪農を行っているなどの強みや、農業と漁業の産業間の連携がうまくいっていないなど、いくつかの問題点が見つかった。ヒアリング調査の他に、アンケート調査や、浜中町の観光名所を周ることも行った。

今回の研修を通して、個人的に浜中町で一番問題があると感じた部分は、町民と行政とのずれ違いがあるということが感じられた。町民側の意見としては、行政が何も行動しないということが話題に上がっていた。この研修で見つかった問題を解決するための政策提言を浜中町へ今後行う予定である。

五来 マクシム

地域経済学科2年
札幌創成高校出身

1部 大貝健二ゼミⅡ

参加学生数 11名



大貝 健二
地域経済学科
教授



和田酒造合資会社にて

「オール山形」の酒づくりから日本酒の可能性を考える

研修地：山形県山形市・東根市・村山市・西川町・酒田市・河北町

●研修目的

「吟醸王国」として全国的に知られる山形県の酒造業界の取り組みを通じて、いかにしてオール山形の酒造りを実現させたのかを学ぶ。そして、北海道の酒造業界でも同様の取り組みによって酒質の向上が可能なのか考えることが本研修の目的である。

研修先・日程

- 9月13日 山形県酒造組合、山形県農政部農業技術環境課
- 9月14日 株式会社 六歌仙、Link MURAYAMA、株式会社 設楽酒造店
- 9月15日 有限会社 木川屋酒店、鶴岡市内視察
- 9月16日 和田酒造合資会社

●総括

本研修から明らかになったのは、以下の点である。第1に、山形の酒づくりで見てきたことは、1980年代以前は知名度、技術水準ともに高くはなかった。その中で、「山形研鑽会」を組織し、技術力の向上、人材育成を図ってきた。酒造組合と県、酒蔵、酒米生産農家が一体となり、酒づくりを展開している。特に、元工業技術センターの小関氏を中心に、徹底した酒造技術の情報公開、データによる酒づくりを進めてきた。その経緯が、今日の山形県酒造業の技術水準を押し上げてきたことに直結する。すなわち2022年度全国新酒鑑評会において全国最多受賞件数の獲得である。

第2に、山形県酒のブランド化である。技術の底上げを基に、1990年代にはDEWA33プロジェクト（酒造好適米「出羽燦々」の誕生を機に、酵母、麹菌、水すべてを山形県産でまかない、一定の品質基準をクリアした純米吟醸酒を認定するもの）が行われた。この成果を得て、2016年には都道府県単位で日本初のGI認証取得、さらに2021年からは酒造好適米「雪女神」とオール山形による「山形賛香」という純米大吟醸酒の生産に至る。

日本酒の酒質向上が求められるなか、山形県の時間をかけた取り組みは、十分参考に値するものであった。

学生研修記

山形県での地域研修を通して



森 景斗
地域経済学科3年
札幌藻岩高校出身

私たちは日本酒をテーマに掲げ、特定名称酒というものに注目しました。その特定名称酒の製造が盛んな山形県へヒアリング調査に赴き、酒造組合や酒蔵、酒屋の方々からお話を伺いました。

ヒアリングを通して、51社もある酒蔵が同じ方向を向いているが、それぞれが個性的な日本酒を製造していることが分かり、それが他の県ではなかなか見られないすごいことだと気づきました。

また、研修の中で特に印象に残ったのは、それぞれの酒蔵の地元の人への関わり方です。どこの酒蔵でも地元の人に支えられてきたと仰っていて、地元の人を大切にしている様子を窺うことができました。実際に町のお祭りで地元の人にお酒を振る舞っているところも見させていただき、酒造りに対して地元の人たちに愛されているということも大事なのかなと考えさせられました。今回の研修で日本酒の魅力についても知ることができました。この経験を今後の活動に活かしていきたいです。

日本酒研究 in 山形



杉本 敦紀
地域経済学科3年
札幌平岸高校出身

大貝ゼミ3年生は、日本酒をテーマに山形へ行った。山形を調査地としたのは、「吟醸王国」を謳っていること、令和4年度の日本新酒鑑評会で金賞受賞数全国一位を実現したことが理由である。山形県には51の酒蔵がある。そのうち株式会社六歌仙、株式会社設楽酒造店、和田酒造合資会社のほか、山形のお酒を主に扱っている有限会社木川商店、山形県酒造組合を訪問した。

研修を終えて感じたことは、酒蔵、技術者、酒米生産者が一体となった「all山形」の徹底である。DEWA33キャンペーン、酒造好適米「雪乙女」を使用した山形賛香、地理的表示「GI山形」の取得など、北海道では見られない取り組みには、信頼関係を基にした製造技術の開示、数値化と情報共有があるということである。単に美味しいだけでなく、造り手の絶え間ない努力の成果だと学んだ。今回事例を参考にして、北海道の酒造について研究を続けていきたい。

写真①山形県酒造組合。②山形酒のテイスティング。③株式会社 六歌仙。④LINK MURAYAMA。⑤株式会社 設楽酒造店。⑥木川屋酒店。⑦和田酒造合資会社。



2部 大貝健二ゼミ I・II

参加学生数 4 名



大貝 健二
地域経済学科
教授



知床五湖にて

Re-design によるビジネスで地域課題を 解決する経営を学ぶ

研修地：北見市・網走市・斜里町・大空町・遠軽町

● 研修目的

本研修では、地域に根差した中小企業は、自社の利益を追求するだけでなく、地域課題をビジネスで解決することを意識しているのではないかと、いう仮説をたて、オホーツク地域の企業ヒアリングを通じて実証することを目的とした。

研修先・日程

- 9月4日 環境大善
- 9月5日 オホーツク総合振興局、北こぶしホテル&リゾート、園子水産、ディスカバー
- 9月6日 知床五湖散策、BlueM株式会社、大地のMEGUMI
- 9月7日 株式会社 渡辺組

● 総括

今回訪問した企業の多くが、地域の課題、可能性を明確に認識していることが分かった。第1に、地域資源の活用である。例えば、北見市の環境大善では環境汚染の原因である牛の尿から製造した消臭剤の開発、販売を展開している。他方で、鹿害は道内各地で問題になっているが、遠軽町の渡辺組では、多角的な事業展開の一つとして、ジビエ事業を行っている。厳格な狩猟方法、衛生管理を実現し、エゾシカをジビエとして大都市圏を中心に出荷し高評価を得ている。第2に、リブランディングを意識している点である。知床旅情、世界自然遺産認定と、観光ブームを2度経験している、北こぶしホテル&リゾートでは、観光形態の変化に伴って積極的なブランドの再構築を行ってきているほか、「クマ活」を実施している。草刈りなどを通じて、地域の資源ともいえるヒグマとの共存を意識している。また、BlueMでは、地域の農産物を加工し付加価値を上乘せる、デザインで地域のストーリーを伝えるなどの取り組みを行っている。ここでは字数の都合上書ききれないが、他の訪問先企業も同様に、地域資源のリブランディングを通じて地域課題をビジネスで解決する取り組みを行っていた。

学生研修記



土谷 葵
地域経済学科 2年
北海高校出身

地域研修を通して学んだこと

私たち大貝ゼミナールは、オホーツクへ訪問しました。この地域研修の目的は、地域の活性化は、地域の企業が率先して行ってこそ実現すると思え、「地域がこうあったらいい」という思いなど、地域課題をビジネスとして取り組む企業を訪問し、その取り組みを見ることでした。訪問した中で最も印象に残った企業は、環境大善株式会社さんです。酪農業が盛んな北見市では、牛の糞尿の処理が公害問題になっていました。そこで、牛の尿を微生物で分解した液に消臭効果があることがわかり、有機物の腐敗臭やアンモニア臭などの不快な臭いだけ消し、その他の匂いは消さないという「きえ〜る」が誕生したという話が印象に残りました。環境大善株式会社さんは、世界中に飛躍しています。

今回の地域研修を通して、オホーツクの訪問した企業は共通点がありました。それは、地域課題をビジネスに変えていて、さらに、地域発展に繋がっているということがわかりました。



木村 日向太
地域経済学科 3年
旭川実業高校出身

地域課題をビジネスとして考える

「地域活性化は、地元の企業が率先して取り組んでこそ実現される」これは、私たちゼミの考えであり、これを確かめることが今回の研修の大きな理由であった。実際にオホーツク地域を訪れ、訪問先での体験を通じたことで、この考えは、間違いないと確信することができた。

今回訪問した企業は、地域の課題や足りない部分を補うための取り組みをしていた。例えば初日に訪問した環境大善では、課題であった牛の糞尿による公害問題を、牛の尿を原料とする消臭液の開発・販売により地域課題を解決していた。他にも渡辺組では、シカによる農業被害や行政費用の増大という課題をオホーツクジビエという会社を立てて解決に取り組んだ結果、先述した課題の解決に加え、地域の特産品を生み出すことにも成功している。

ここまで述べたのは、研修に訪れた企業の取り組みの数例である。地域課題は、ビジネスチャンスであり、そうしたことに取り組む企業がある地域の未来は明るいと思う。今回の研修で学んだことを発展させ、このような企業を増やすための取り組みには何が必要であるのかを今後は考えていきたいと考えている。

写真①匂わない尿のプール。②北こぶしリゾートのリ・デザイン。③リ・デザイン(サウナ)。④園子水産。⑤知床五湖。⑥UMINOBA。⑦株式会社渡辺組。⑧オホーツクジビエ。



1部・2部 川村雅則ゼミ I・II

参加学生数 1部23名・2部9名



川村 雅則

経済学科
教授



1部ゼミメンバー

学生アルバイトとワークルール 労働問題解決手段としての労働組合

研修地：札幌市

◎研修目的

例年と同じく、聞き取り調査とアンケート調査を通じて、学生アルバイト等の実態把握につとめた。あわせて、ワークルール(労働法)の認知・理解状況の把握につとめた。労働組合からの聞き取りも行った。アルバイト問題の解決には、ワークルールを知ることに加えて、それを使うという主体的な行動が必要と考えてのことである。

研修先・日程

- 前期
 - ・大学生のアルバイト問題や学費負担・奨学金利用の状況など(以下、学生アルバイト等)を学ぶ。
 - ・基本的なワークルールを学ぶ。
 - ・「北海学園大学 学生アルバイト白書2023」(以下、「白書」)の作成を念頭において、学生アルバイト等の調査の準備に取りかかる。まずは、聞き取り調査で学生アルバイト等の実態を調べる。
 - ・今年度の「白書」も連載で随時配信することを決定。第1報となる「白書(連載1)」を7月29日に配信。
- 夏期休暇
 - ・1部生を中心にアンケート調査の準備を開始。今年度は、先行研究にも学びながら、ワークルールに関する学生向けの設問を自分たちで考案する。
- 後期
 - ・10月下旬にさっぽろ青年ユニオンからの聞き取り調査を実施。
 - ・11月中旬にアンケート調査を開始(G-PLUSで学生に配信)。
 - ・12月11日、アンケート調査の結果を取りまとめた「白書(連載4)」を完成させて配信。
 - ・12月13日、労働経済論の授業で調査結果の中間報告。
 - ・学生アルバイト等の問題解決を求めて、札幌市議会議員各会派に調査結果など資料を持参(2024年2月)。

写真①調査・研究の企画作業の風景。②今年の調査・研究はどうか。③④聞き取り調査の取りまとめ、アンケート調査内容の検討。⑤さっぽろ青年ユニオンから聞き取り調査。⑥他ゼミにアンケート調査のお願い(少し緊張)。



◎総括

北海学園大学に在籍する全ての学生を対象にしてウェブアンケート調査を2023年11月に実施。有効回答410人のうち「現在アルバイトをしている」368人(1部280人、2部88人)を対象に集計・分析を行った。以下では、1部生の結果を中心に報告する。

第一に、最初のアルバイトを始めた際にワークルールを知っていたか尋ねたところ(表1)、約8割が知らなかったと回答。「現在」ワークルールを知っているかを尋ねると約6割が知っている状況にまで改善されるが、ただ、実際にどこまで知っているかは後でみるとおり検証が必要である。

第二に、最初のアルバイトを始めたのが「高校生」だったのは27.9%(2部生では47.7%)であるが、おそらく、高校の授業では十分なワークルール教育は実施されていないと思われる。それを推測させるのが次の調査結果である。すなわち、現在ワークルールを知っていると回答した者にどこで/どのように知ったかを複数回答可で尋ねたところ(表2)、「高校の授業を通じて」は8.1%に過ぎず、「大学の授業を通じて」が57.8%、「アルバイト経験を通じて」が43.4%であった。

第三に、現在のアルバイトで働き始める際に労働条件や雇用契約書などの書面を受け取ったか(インターネット上で確認できる場合も含む)は、「受け取った」は74.3%を占めるものの、「受け取っていない」が9.6%、「わからない、覚えていない」が15.4%である。過去のアルバイトを含め、求人情報と実際違った経験が「ある」のは27.5%であることを考えても、契約・入職時に労働条件をチェックするという姿勢が必要である。なお、重要な労働条件は書面での明示義務が使用者にあるのを「知っている」のは80.0%であった。

第四に、学生アルバイトが有給休暇を取得出来ることはおおむね知られているものの、自分のアルバイト先で、学生アルバイトが有給休暇を使用できるかは、「わからない」が46.1%、「使用できない」も15.0%となり、「使用できる」は38.6%にとどまる(以上は表3)。ここ数年、同様の結果が出ているが、ワークルールを知ることと職場で使える/守らせることとの間に乖離がみられる。

なお、それは、(1)給料の支払い単位時間が1分単位でなければならないことを「知っている」が全体の3分の2に及ぶ(66.8%)ものの、実際に「1分単位」で処理されているものが46.9%にと

学生研修記



佐々木 好誠
経済学科2年
稚内高校出身

地域研修を終えて

私たちのゼミでは、ブラックアルバイトをなくし、学生アルバイトが働きやすい環境づくりに貢献するというを目的として、北海学園生を対象としたアンケート調査と聞き取り調査を行いました。アンケートでは、有給休暇や休業手当、ハラスメントなど学生アルバイトの実態を知り、ワークルールを学ぶ必要性を感じさせられました。また、さっぽろ青年ユニオンさんから、実際に学生アルバイトのトラブルに直面した際の解決への助言や労働問題・相談について話を聞きました。

調査で印象に残っている点として、有給休暇を取ることができない理由の中で、人手不足や上司に言えないなどの職場での雰囲気に関係していることがわかりました。自分自身も以前のアルバイト先では言い出しづらくて使うことができませんでした。使用できる立場にあっても、人間関係やお店の事情で使用することができないということはこれからも着目すべき問題だと感じました。

また、調査結果の中で、様々な労働問題を発見し現状を把握した上で、他人事ではなく自分自身に置き換えて考えていく必要があると感じました。

表1 最初のアルバイトの際及び現在のワークルールの認知状況
注：対象は1部生(右、同様)

	単位:人、%			
	最初		現在	
	280	100.0	280	100.0
よく知っていた/いる	8	2.9	30	10.7
まあ知っていた/いる	53	18.9	143	51.1
あまり知らなかった/な	143	51.1	67	23.9
全く知らなかった/ない	76	27.1	39	13.9
無回答			1	0.4
(再掲)知っていた計		21.8		61.8

表2 ワークルールを知った手法・契機【複数回答可】

	単位:人、%	
	173	100.0
高校の授業を通じて	14	8.1
大学の授業を通じて	100	57.8
インターネットや本など自分で調べて	54	31.2
アルバイト経験を通じて	75	43.4
メディアを通じて	19	11.0
イベントや講演会を通じて	3	1.7
友人や家族を通じて	22	12.7
その他	1	0.6
無回答	4	2.3



2部ゼミメンバー

どまることや、(2) 制服への着替え時間にも賃金が支払われる必要があることを「知っている」が65.4%であるものの、制服への着替えに賃金が支払われていないという訴えが50.7%に及ぶことにも共通してみられる。

第五に、逆に、まだ十分に知られていない制度もある。例えば、休業手当制度は「あまり知らない」が33.6%、「全く知らない」が26.4%。シフトカットや早上がりにも適用される同制度だが、それぞれ4分の3が、適用されることを「知らない」と回答。ゆえに、普段に、「シフトカットの経験があり、なおかつ、休業手当は支払われていない」ものが26.6%、「早上がりの経験があり、なおかつ、休業手当は支払われていない」が32.5%（飲食店で働いているものに限定すると、それぞれ32.0%、51.0%にまで増加）。

第六に、これまでのアルバイトの中でのハラスメントの経験を尋ねた（表4）。職場先の店長や従業員からのハラスメントは、「店長や従業員に威圧感を感じる」が28.2%と多いほか、「自身の性格や人格を否定されるようなことを言われた」が10.4%、「暴力や暴言を受けた」が7.9%など。また、客・利用者からのハラスメントでは、「理不尽なクレームや言動を受ける」が32.5%で、これを小売店で働いている者に限定すると49.2%であった。

最後に、過去のアルバイトを含めアルバイト先の労働条件や労働環境を改善したいと思ったことはあるか（表5）。改善の行動を起こしたかどうかはともかく、改善したいと思ったことがあるものは約6割に及んだ。そのうち改善の行動を起こしたものでは、「店長や従業員に相談した」が46.9%、「アルバイト先にトラブル改善を訴えた」が28.6%だった。逆に、行動を起こさなかったものでは、「面倒だったため」が7割に達し、「何も変えられないと思ったため」が42.0%で続く。

学生のこうした意識をふまえて、労働法・労働組合を教えていくことが教育機関の課題になると思った。なお、ワークルールを学ぶ必要性は、「とても感じている」に限定しても43.2%であった。
今年度の『白書』は、次のURLにアクセスし「学生アルバイト」のカテゴリを選択してご覧ください。
<https://roudou-navi.org/>



梅田 莉来

経済学科2年
札幌新川高校出身

聞き取り調査を通じて学んだこと

今年度私たちのゼミでは、近年の学生アルバイトが抱える問題を把握することで、ブラックアルバイトを無くし、学生が働きやすいアルバイト環境をつくることに貢献することを目的として、北海学園大学生を対象にしたアルバイトに関するアンケート調査を行ったり、労働環境の改善の手段の一つとなる労働組合について知るために、実際にさっぽろ青年ユニオンの方に聞き取り調査を行いました。

ユニオンの方々への聞き取り調査の結果、今年は、職場内での虐待やハラスメントに関する相談が多いという特徴のあることがわかりました。自分自身もアルバイト先でハラスメントを受けた経験があり、今回の調査と自身のトラブル経験から、このような問題が起こっている原因は、労働者と使用者が対等な立場にないことが問題としてあるためだと思いました。

個人的に、この問題は労働者が労働環境を変えるための働きかけ自体をし辛くしていると思います。そのため、ユニオンのような自身の労働環境について気軽に相談できる団体を学生にもっと認知してもらうことが重要なのではないのでしょうか。

表3 有給休暇制度の認知状況と、現在のアルバイト先で使用可能か

	単位:人、%	
	280 100.0	
学生アルバイトも条件を満たせば有給休暇を取得出来ることを知っているか	よく知っている	118 42.1
	まあ知っている	106 37.9
	あまり知らない	32 11.4
	全く知らない	24 8.6
無回答		
	280 100.0	
現在のアルバイト先では学生アルバイトは有給休暇が使用できるか	使用できる	108 38.6
	使用できない	42 15.0
	わからない	129 46.1
	無回答	1 0.4

表4 これまでのアルバイト経験の中でのハラスメント経験の有無【複数回答可】

	単位:人、%
	280 100.0
店長や従業員から暴力や暴言を受けた	22 7.9
自身の性格や人格を否定されるようなことを言われた	29 10.4
店長や従業員に威圧感を感じる	79 28.2
店長や従業員に交際を迫られたりひびいた言動をされる	10 3.6
差別（男女差別、学歴差別）を受ける	5 1.8
無視されたり仲間はずれにされる	7 2.5
達成できないような過大な要求をされる	15 5.4
シフトに入れてもらえなかったり仕事を考えられない	9 3.2
客・利用者から、理不尽なクレームや言動を受ける	91 32.5
客・利用者から、交際を迫られたりひびいた言動をされる	9 3.2
ハラスメント被害を店長やアルバイト先に相談したのに、被害を軽減されたり、自分のせいとされたりした	1 0.4
その他	3 1.1

表5 過去のアルバイトを含め、アルバイト先の労働条件や労働環境を改善したいと思ったことはあるか、その際に、何か改善の行動を起こしたか

	単位:人、%
	280 100.0
改善したいと思ったことがあり、改善の行動を起こした	49 17.5
改善したいと思ったことはあるが、改善の行動は起こさなかった	112 40.0
改善したいと思ったことはない	114 40.7
無回答	5 1.8

表6 どのような改善の行動を起こしたか【複数回答可】注：対象は、表5の「改善の行動を起こした」と回答したもの。

	単位:人、%
	49 100.0
アルバイトを辞めた	22 44.9
アルバイト先にトラブル改善を訴えた	14 28.6
店長や従業員に相談した	23 46.9
労働基準監督署に相談した	1 2.0
友人や知人に相談した	13 26.5
大学や親に相談した	10 20.4
その他	4 8.2

表7 改善の行動を起こさなかった理由【複数回答可】注：対象は、表5の「改善の行動を起こさなかった」と回答したもの。

	単位:人、%
	112 100.0
面倒だったため	79 70.5
関わりたくなかったため	31 27.7
何も変えられないと思ったため	47 42.0
店長や従業員が怖かったため	14 12.5
人間関係が悪くなると思ったため	28 25.0
その他	2 1.8
無回答	



1部 佐藤信ゼミ I

参加学生数 15名



佐藤 信
地域経済学科
教授



コープさっぽろエコステーション前にて

コープさっぽろが行うSDGs実践についての学習

研修地：江別市・石狩市・札幌市

●研修目的

全道企業の中でもSDGs(持続可能な開発目標)の実践を先進的に行っているコープさっぽろと取引企業を対象として、リサイクルセンター、ペットボトルの回収・再生工場および特徴ある店舗を訪問し、SDGsの最先端の取り組みを学習することを課題とした。

研修先・日程

8月29日 コープさっぽろエコセンター・エコステーション(江別市)
株式会社エコロジーシステム(石狩市)
コープさっぽろ西宮の沢店(札幌市)

写真①千葉さんからコープさっぽろの静脈流通についての説明を受ける。②エコセンター工場内でプラスチック回収と再利用の仕組みを聞く。③エコセンターではぬいぐるみも回収している。④株式会社エコロジーシステムに到着。⑤木村さんからプラスチック再利用の仕組みを説明していただく。⑥フレーク状になったプラスチック。⑦木造のコープさっぽろ西宮の沢店。⑧店舗内には環境配慮の様々な工夫がある。



●総括

コープさっぽろは、北海道の8割以上の世帯が組合員となっている供給高3千億円を超える協同組合である。また、店舗や宅配事業の他、移動販売事業など多種多様な事業を行っている。中でも、組合員から出される資源(牛乳紙パック、新聞紙、廃油、服・靴など)の回収、リサイクルに繋げる事業を黒字化するなど注目すべき取り組みもある。ゼミではエコセンター(回収工場)、併設するエコステーション(教育施設)の視察をまず行った。食品トレイの色ごとに再生利用方法が異なるなどリサイクルの詳細を知った。次いで(株)エコロジーシステムを訪問し、ペットボトルの回収リサイクルの現場の取り組みや工場内の手選別の苦勞を学んだ。最後に、コープさっぽろ西宮の沢店を訪問した。店舗の玄関横にはペットボトルの回収機を設置しており、組合員が買い物のついでにリサイクルに取り組み、併せてその意義を知ることが出来るようにしている。参加学生たちは施設訪問を通じてごみの分別の大切さなどを深く学ぶことができたと感じた。

今年の地域研修においても、暑い中での視察対応ならびに日程調整にご協力して下さった関係の方々へ感謝いたします。

学生研修記

畔上 都和
地域経済学科 2年
石狩南高校出身



SDGsを実感できた研修

今回の地域研修では、コープさっぽろエコセンター、株式会社エコロジーシステム、コープさっぽろ西宮の沢店を訪問しました。私はこの中で、コープさっぽろ西宮の沢店の視察が最も印象に残りました。一般の人でも気軽にいける店舗には、さまざまな工夫が施されていることを実感しました。外装は木を基調としており、入り口には早速ラベルとキャップを分別してから入れるペットボトル回収機がありました。店内には、組合交流ルームや発電電力のモニターがあり、壁にはCO₂削減に関することがかかれています。子供のためのコープさっぽろのブランド商品なども多数販売されており、自然とSDGsが目に入ってくるような構造になっていました。

このような取り組みを裏でこそこそやるのではなく、一般の人へ積極的に訴えかけていくことで、SDGsへの関心が高まり、国として変わっていく可能性をとて感じました。

土生 月乃
地域経済学科 2年
千歳高校出身



家庭からSDGsに参加する意識

私たちはコープさっぽろ野幌店、西宮の沢店、江別市のコープさっぽろエコセンター、石狩市にある株式会社エコロジーシステムを訪問しました。

その中で私が興味を持ったのは株式会社エコロジーシステムです。そこではペットボトルの水平リサイクルのための作業工程を見学しました。水平リサイクルは半永久的にリサイクルできるため環境にやさしい方法であると言えます。まず、ペットボトルのラベルやキャップを外す作業をおこないますが家庭で外すことで効率的にリサイクルできるとお話していただきました。その後、洗浄されフレーク状に粉碎されます。粉碎することで粉碎前の約10倍の量を運ぶことができコストの削減に繋がります。

コープさっぽろ西宮の沢店では水平リサイクルのための回収ボックスも確認できました。今回の研修で家庭でも気軽にSDGsに参加することができると感じました。



海クリ会場（小樽ドリームビーチ）にて

1部 佐藤信ゼミⅡ

参加学生数 12名



佐藤 信
地域経済学科
教授

協同組合のSDGs活動と本学の取り組み

研修地：札幌市

●研修目的

当ゼミでは、去年に引き続きコープさっぽろ主催の海のクリーンアップ大作戦（海クリ）に参加し、海洋プラスチックなどの環境問題の現状を学習した。またコープさっぽろがペットボトルの水平リサイクルに取り組んでいることから、北海学園生協が導入したりサイクル用回収ボックスの利用状況や課題を明らかにすることを目的とした。

研修先・日程

- 6月17日 海のクリーンアップ大作戦への参加（小樽ドリームビーチ）
- 10月13日 学内ペットボトル回収場所の実態調査
- 10月27日 学内。北海学園生協西野専務と意見交換

写真③海クリでゴミ拾いを行う参加者。④集められたごみ。⑤食堂に設置された水平リサイクル用の回収ボックス。⑥ボックスの中（最初は分別が不十分）。⑦ゼミ生が提案したポスター掲示および貼り紙。



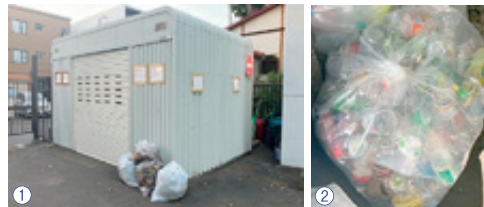
●総括

2019年のコープさっぽろと本学との連携協定締結を契機として、「海のクリーンアップ大作戦」（海クリ）というコープさっぽろ主催の海岸清掃活動に2022年から参加している。この活動を通して海洋ゴミ問題やプラスチック削減の意義の学習につなげてゆきたいという狙いがある。

連携協定を踏まえて、大学内に水平リサイクル（ペットボトルからペットボトルにリサイクルする方法）のための回収ボックスを北海学園生協の支援を受けて6月に設置した。ゼミでは学内の従来のペットボトルの回収ルートの実態を調べるとともに、課題も確認した。水平リサイクルのための回収ボックス（2台）の状況については生協専務からヒアリングするとともに、実際に改善への工夫を行った。現状は、混入物が見られたり、シールやキャップを外していないペットボトルも混入しているが、ポスター掲示などの注意喚起をすすめた結果、若干の改善がみられるようになっている。

いまのところ水平リサイクルの認知度が低く、意識も高いとは言えない。海クリのような活動への参加を通して、学生たちへの認知度を高める必要があるのではないかと考えられる。

今年の活動に関して、協力をしていただいたコープさっぽろおよび北海学園生協の関係者に深く感謝するものです。ありがとうございました。



写真①北海学園大学のペットボトルや缶類はここに集められる。
②缶・ペット類は事業ごみとしてまとめて回収。

学生研修記

北海道内におけるSDGsへの意識

今年のゼミでは昨年と同様コープさっぽろ主体の「海のクリーンアップ大作戦」に参加したことに加えて学内の水平リサイクルに関して西野専務（北海学園生協）を交えて話を聞いたことで現状を理解することが出来た。

「海クリ」では昨年とは違う海岸に行き、落ちているごみの違いを理解したとともに、海からゴミをなくすことは不可能なのではないかと感じてしまった。これでは、海の監視を強めることくらいしか現時点では対策はできなさそう。しかし、若年層から中高年齢層まで多くの参加者が海に足を運んでいた。幼少期からごみを外に捨てることは悪であるという意識を植え付けることで次第に海のごみの量は減っていくのではないだろうか。

学内水平リサイクルの取り組みに関しては、少しの呼びかけではラベルをはがさず捨てていた習慣を変えることは難しいと感じた。ラベルをはがしてもらうには特典or罰則をつけるなども考える必要がある。

水平リサイクルについて

今回の研修では、ペットボトルの水平リサイクルについて調べた。実際に北海学園大学内でも今年6月から開始、使用済みの製品がいったん資源となり、また同じ製品として生まれ変わるリサイクルシステムのことを言う。今のところ生協食堂とその近くの廊下に設置してある。学生の中では水平リサイクル専用のごみ箱があること自体知らない人が多数おり、まだまだ認知度が低い状況にある。その解決策を学園生協西野専務の話も交えながら、私たち佐藤ゼミで考えこれから実行していく予定だ。具体的には、認知度向上のためジープラスで配信したり、ポスターを貼って水平リサイクルとはどのようなものなのかを知ってもらうということだ。まず知ってもらわなければ、学生は手軽で捨てやすい普通のごみ箱に捨てるだろうし、手間のかけることは私自身もしないと思う。認知度を上げることがこの水平リサイクルの1番の課題である。



松屋 駿汰
経済学科3年
岩内高校出身



菊地 倫太郎
経済学科3年
旭川実業高校出身

1部 牛久晴香ゼミⅡ

参加学生数 11名



牛久 晴香
地域経済学科
准教授



地域研修のようす

阿寒におけるアイヌ民族の暮らしと将来の課題

研修地：釧路市阿寒町

●研修目的

(1)日本の先住民族であるアイヌの文化や世界観を学ぶこと、(2)アイヌ文化を活用した地域振興や文化復興の試みについて現状を学ぶこと、(3)アイヌの人々が直面してきた歴史的な抑圧や差別に対する補償について、国際的な権利回復運動との関係から理解を深めること。

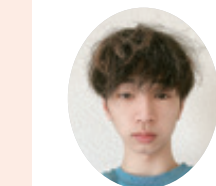
研修先・日程

- 8月9日 シアタイコロ(アイヌ古式舞踊見学) アイヌ生活記念館・アイヌコタン(各自フィールドワーク)
- 8月10日 前田一步園財団(新井田利光理事長のご講演) 一步園光の森(認定ガイド瀧口健吾氏による野外授業) 阿寒アイヌコンサル(廣野洋理事長ご講演)
- 8月11日 阿寒湖畔(各自フィールドワーク)

写真①阿寒湖アイヌコタン。②瀧口健吾氏による野外授業。③アイヌ工芸(木彫り)の継承事業。④前田一步園創始者・前田正名氏の銅像。⑤前田一步園財団の環境保全事業。⑥見ているだけでも楽しいアイヌコタンのお店兼住居。⑦足湯-阿寒湖は夜もイベントが盛りだくさん。⑧代表的なお土産・木彫りのキーホルダー。



金子 大貴
経済学科3年
札幌手稲高校出身



天野 祥佑
経済学科3年
札幌平岡高校出身

●総括

ゼミのテーマは「北海道から考えるグローバルイシュー」である。2023年度はとくに先住民族に焦点を当て、釧路市阿寒町で研修を実施した。先住民族は、主流社会とは異なる独自の文化や言語を持ち、国家のなかで経済的に搾取され、文化的・政治的に抑圧されてきた人々と定義できる。先住民族の権利回復運動は国家よりも国際機関が主導する形で、かつ先住民族同士の国境を越えた連帯によって進められてきた。本研修では、現場での見聞をグローバルな権利回復運動の文脈で捉えなおすことを意識した。

研修では、アイヌ古式舞踊の見学や、「一步園光の森」ガイド・瀧口健吾氏による野外授業を通じて、アイヌの世界観や自然観、植物に関する知識や利用法を学んだ。また、アイヌコタンの視察やインタビューをつうじてアイヌ文化観光の現状を五感でとらえた。さらに、一般社団法人阿寒アイヌコンサルを訪問し、アイヌ文様の商標登録の試みと、「正しい」文化継承の難しさや可能性についても学びを深めた。ご講演後の質疑応答やコタンの方々へのインタビューを通じて、ご自身の人生経験やその時感じたこと、「アイヌ新法」制定後の補償の意義と今後への期待についてもお話を伺った。研修にご協力いただいたみなさまに心より感謝申し上げる。

学生研修記

地域研修を通して学んだこと

今回の研修では、釧路市阿寒町を訪れ、アイヌ文化の現状とその伝承活動や、阿寒における自然保護活動などについて学びました。阿寒にはアイヌコタンというアイヌの人々の集落があり、古式舞踊の鑑賞や、アイヌの方々から様々なお話を聞くことができました。アイヌの伝承活動については阿寒アイヌコンサル理事長にご講演いただき、アイヌ文化の知的財産の保護など、文化を正しく伝承していくための取り組みについて学びました。また、自然環境の保護活動を行っている前田一步園財団でもご講演を聞き、その歴史や森林保全事業などについて学びました。今回の研修ではアイヌの伝承活動においても自然保護活動においても、現状の課題を受け止め、その解決に向けて未来を見据えた活動を行っていることがわかり、その挑戦する姿勢を学ぶことができ、とても有意義な時間を過ごすことができたと思います。

アイヌ文化観光の地域間格差

私たちは先住民について勉強するため、アイヌ民族が多く住む釧路市阿寒町を訪れました。私はとくにアイヌ文化を活用した観光への取り組みに、地域ごとに差があるという点に関心を持ち、研修に参加しました。

研修では、一般社団法人阿寒アイヌコンサルの廣野洋理事長にお話を伺うことができました。現代にも差別はまだ残っていて、周りになじめない人がバス運転手など一人でできる仕事に就き、人と関わる仕事や観光産業を避けることがあると分かりました。また、アイヌ文化観光に関わる補助金を受けるには市役所を通さなければならないため、行政との関係によっては申請が難しい、逆に市役所主導での申請となりアイヌの人々が置き去りになる地域もあるなど、地方公共団体との関係が観光への参加の度合いに関わっていることも学べました。

以上から、アイヌ文化観光産業を行う地域を増やしていくためには、アイヌの人々に寄り添い、地域で協力して観光に携わっていける環境作りが必要であると考えました。



1部

西村宣彦ゼミ I・II 浦幌班

参加学生数 15名



西村 宣彦
地域経済学科
教授



浦幌町のパートナー方々とFUTABA前にて集合写真

「多世代が幸福に暮らせる持続可能な地域づくり」の実証実験

研修地：浦幌町

●研修目的

商店のない上浦幌地区の高齢者サロンの開催日に、買い物機会を創出する移動販売の実証実験を実施するとともに、高齢者への「聞き書き」を実施し、消えゆく「地域の記憶」という地域資源の掘り起こしや、若者との交流を通じた高齢者のウェルビーイング向上の可能性を検討した。

研修先・日程

第1回現地訪問

- 8月21日 ハハハホステル、トリノメ商店（開業準備中）見学、（株）リベリエンス代表・小松輝氏講義「高齢者サロンについて」（浦幌町保健福祉課・樋口高齢者福祉係長）、講義「上浦幌地区について」（浦幌町立博物館・持田学芸員）、親睦・交流会（BBQ）
- 8月22日 協道の駅うらほろ 見学、上浦幌地区・高齢者サロンに参加・交流、伊場ファーム代表・伊場満広氏訪問・見学、JAうらほろ上浦幌支所訪問、ファーム十字代表・十字満氏訪問・見学、ポップコーンづくり体験
- 8月23日 講義「ハマナスポイントについて」はまなす商店会・武田理事長、高室理事）、町内商店への挨拶回り、札幌での浦幌物販イベントに関するミーティング、試食
- うらほろ特産品フェア@チカホ（札幌）
- 9月30日 商品搬入、売場設営、1日目販売（14時～18時）、撤収作業、慰労親睦会
- 10月1日 商品搬入、売場設営、2日目販売（12時～16時）、撤収作業

第2回現地訪問

- 10月23日 商店を回って商品受け取り、ポップ作成、エアレジ入力、機材の確認（買い物班）、博物館で聞き書きの準備・直前練習（聞き書き班）
- 10月24日 上浦幌地区に移動、移動販売＆聞き書きの会場設営・商品陳列等の準備、移動販売（10時～13時）、撤収作業、聞き書き（10時～14時）、振り返りのミーティング

写真①「ファーム十字」訪問・見学。②リベリエンス小松代表のレクチャー。③上浦幌サロン。④うらほろ特産品フェア。⑤移動販売イベント告知。⑥移動販売の様子。



●総括

（一社）十勝うらほろ楽舎、HBC、西村ゼミの3者で、2021年度から協働事業として実施している。昨年度は同町吉野地区で移動販売イベントを開催し、一定の手応えを得た。今年度、事業を実施した上浦幌地区は本別市街に近く、買い物困難が深刻な地区ではないが、町が発行する行政ポイントを使える店がない。行政ポイントでおトクに買い物ができ、町内経済循環の向上にも寄与すべく、高齢者サロンに合わせて移動販売イベントを実施した。町内飲食店の弁当を増やすなど、品揃えを改良したほか、非日常の商品として「プールアンジュ札幌店」のクロワッサンラスクを販売し、好評を得た。また移動販売と並行して、高齢者への聞き書きを実施した。地域での昔の暮らしを若者に話すことが、高齢者のウェルビーイングにつながり、消えゆく「地域の記憶」を記録することが、今後の地域づくりに生かせる地域資源になりうると考え、町立博物館のサポートを得て実施したが、興味深いお話の数々を伺うことができた。またスピノフ企画として、町と共催で「うらほろ特産品フェア」を札幌チカホで開催した。地域の情報発信を通じた関係人口の創出や資金づくりに挑戦し、課題を洗い出した。学生の活動をサポートして下さった皆様に、感謝申し上げたい。

学生研修記

神野 静来
地域経済学科 2年
千歳高校出身



昔の町を知り、語り継ぐことの大切さを知った浦幌研修

浦幌町での「高齢者の買い物機会創出」プロジェクトに参加し、上浦幌地区の高齢者サロンで、移動販売と高齢者の方々への聞き書きを体験しました。私は「聞き書き班」として活動しました。1回目の訪問では、浦幌町について理解を深めるレクチャーを受け、また上浦幌の高齢者サロンを訪問して、高齢者の方々と一緒に「ふまねっと運動」に参加し、少しの時間お話ししました。2回目の訪問では、前回レクチャーしていただいた博物館学芸員の持田さんから、聞き書きの直前準備のアドバイスを受け、本番に臨みました。サロンに参加している高齢者の方々それぞれの人生や、私の知らない昔の時代背景を知れて、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。聞き書きが終わった後、笑顔で帰っていった方や、移動販売に顔を出して購入して下さった方がおり、地域の方々とコミュニケーションをとることの大切さを、身をもって感じる事ができ、とても貴重な経験になりました。

小野 姫音
地域経済学科 3年
岩見沢緑陵高校出身



人々が寄り添い合い、未来を創るために進むまち

昨年に引き続き、浦幌町で高齢者の買い物機会創出プロジェクトに取り組みました。今年活動した上浦幌地区は、多くの人が隣の本別町で買い物をしていますが、移動販売イベントを開催したことで、浦幌町の行政ポイントを利用でき、高齢者の方々のためにも、町内経済循環を高めるという意味でも、意義のある社会実験ができました。また新たなチャレンジとして、浦幌の魅力を札幌の人に伝える「特産品フェア」をチカホで開催しました。2回の浦幌研修と札幌での活動を通して、十勝うらほろ楽舎の方々や上浦幌地区の農家さんや高齢者の方々など、多くの人と関わり、昨年感じたまちの温かさをさらに深く感じました。昨年から5回浦幌を訪ねましたが、今まで知らなかった地域を知り、町民の温かさを知り、地域のために活動することの大変さと、それ以上のやりがいを知ることができました。こんなにも地域と密着したフィールドワークを行うことができ、とてもよい経験になりました。

1部 西村宣彦ゼミ I・II 阪神班

参加学生数9名



西村 宣彦
地域経済学科
教授



大阪城公園にて

公民連携による公園を核とした賑わい創出と エリア再生

研修地：大阪府大阪市・兵庫県神戸市

●研修目的

近年、公園内に民間事業者が飲食施設等を整備し、公園と一体的に管理・運営することで、公園を多くの人で賑わう魅力的な場に再生し、エリア価値の向上につなげる取り組みが全国に広がっている。研修では大阪・神戸の4つの公園・施設を視察し、公園行政における公民連携の意義と課題を考えた。

研修先・日程

- 8月30日 大阪城公園（ジョーテラスオオサカ、ミライザ大阪など）事前視察、天王寺公園（てんしば、てんしばイーナなど）事前視察、道頓堀川水辺整備見学
- 8月31日 大阪市経済戦略局・建設局合同ヒアリング、大阪城公園内ガイド視察（ポーネランドなど）、神戸市中心部（南京町、旧居留地など）事前視察
- 9月1日 Nature Studio（旧湊山小学校）見学・ヒアリング、東遊園地（Urban Picnic）見学・ヒアリング

写真①大阪市役所ヒアリング。②天王寺公園「てんしば」を視察。③とんぼりリバーウォーク。④神戸・南京町視察。⑤廃校を再生させた「Nature Studio」。⑥Nature Studio内「みなとやま水族館」。⑦リバーワークスの村上氏・稲葉氏のレクチャー&質疑。⑧神戸・東遊園地の「芝生の演奏会」。



●総括

大阪城公園と天王寺公園（てんしば）は、2012年に大阪市が策定した『大阪都市魅力創造戦略』の重点エリアとして、民間主体のパークマネジメントを全国に先駆けて導入した。両公園ともリニューアルを通じて、園内に飲食・物販施設等を整備し、市民や観光客の利便性や満足度の向上に取り組んだ結果、来園者数が大幅に増える一方、市の公園管理の人的・財政的負担は小さくなった。一方、神戸市では普段閑散としていた都心の公園「東遊園地」を、多くの市民が憩う魅力的な場にしようと、民間団体が主体となり文化イベントを開催するなど、プレイスメイキング（場づくり）の社会実験を重ね、その成果に立って2023年春、カフェなどが入った施設「Urban Picnic」をパークPFI制度を活用して開設した。大阪市が経済・財政面の成果を追求する中で、市民福祉の向上を図ろうとしていたのに対し、神戸市は市民が芸術・文化に身近に触れられ、自然と人為の調和を図る営みを通じて、都市格やシビックプライドの向上を目指しており、同じ関西でも都市の文化や思想の違いが感じられた。今後札幌でパークPFIを導入する場合、この公園づくりの思想やビジョンに十分留意した方がよい。視察を受け入れて下さった皆様に心から感謝申し上げたい。

学生研修記

香川 柚月
地域経済学科 2年
江差高校出身



公園と人とのつながりを感じた研修

公園を訪問する前と実際に訪れた後で、学ぶ意欲が大きく変わるのを感じた。研修前に事前学習で各公園の概要や特徴を調べたり、訊きたいことをまとめて、公園のことをわかった気持ちになっていたが、実際に訪ねると、知らないことや調べ不足などがたくさんあった。また実際に公園や施設を運営している方から話を聞き、公園やまちをよりよくしようとする熱意を感じ、もっと学びたいという意欲が湧いた。特に印象に残ったのは神戸の東遊園地と「Nature studio」を運営する村上さんと稲葉さんのお話だ。ふたりは「Nature Studio」で地域の人達の思い出を大切にしていると話していた。経営者として収益の確保を考えながら、人とのつながりも大切にしていたのが印象に残った。何かに対して熱意を持ち、やりがいを感じ、行動に移すという、簡単にできないことをしている人達から、多くのことを学んだ。私も今回の経験を生かして、何かに打ち込めるようになりたいと感じた。

伊藤 史華
地域経済学科 3年
札幌旭丘高校出身



市民ファーストな場づくりが生む地域発展

神戸の「Nature Studio」と東遊園地「Urban Picnic」を手掛けるリバーワークスの村上さんのお話が最も印象に残っている。廃校をリノベーションし、水族館や障がい者の作業所などが入る「Nature Studio」では、普通なら解体される建物が、元の良さや面影を残しながら、素敵な場所に生まれ変わっていたことに驚いた。またお話を伺う中で、すべての施設に意味があり、一つも無駄な作りがないことにも驚いた。東遊園地では、時間がかかっても、社会実験を重ねながら、価値のあるものを皆で見つけていくことの大切さを知った。両施設に共通して感じたのは、市民を一番に考えるという姿勢だ。地域の人達を巻き込んだ社会実験も、地域の人達の思い出が詰まった校舎の再生も、すごく難しく大変なことなのに、自分の考えだけで進めるのではなく、地域の人達のことを真剣に考えて形にしていた。それがすごい部分であり、魅力であり、成功の秘訣なのではないかと感じた。

1部

濱田武士ゼミ I・II

参加学生数 27名



濱田 武士
地域経済学科
教授



沼田町の施設内

産学官連携による着地型観光の提案の取組

研修地：沼田町

●研修目的

北空知に位置する沼田町では交流人口の拡大対策を進めている。その一環として、沼田町から依頼を受けて、また(株)まちづくり沼田、地域創造コンサルタント GAROO(株)の協力を得ながら、ゼミ生達が着地型観光モデルのスタートアップに取り組んでいる。

研修先・日程

- 8月28日 富良野市の自然塾と団体での体験学習
富良野市役所でのワークショップ
- 8月29日 町内散策
4グループごとの体験学習
- 8月30日 沼田町関係者とワークショップ
- 11月20日 沼田町関係者とワークショップ

写真①富良野市での自然塾体験。②富良野市でのワークショップ。③化石発掘体験。④農家の方が所有するサウナを見学。⑤夜高あんどん祭りの説明を聞く。⑥林業体験。⑦ワークショップによる発表会。



●総括

準備の期間は2年間とし、その間に社会実装を目指すものとして、本取組を始めた。

地域研修では着地型観光の先行事例として富良野市で行われている自然塾のサービスを体験して、関係者から聞き取りを行った。その上で、沼田町においてどのような着地型観光を取り組むことができるのか、4つのグループに別れて、現地視察や、すでに行われているトマト収穫、化石発掘、林業などを体験して、素案づくりを試みた。4グループは、各々に沼田町の事情を考慮した着地型観光のモデルを作成し、現地でワークショップを2度開催し、ブラッシュアップを図っている。最終案は2024年月に沼田町で報告する予定であり、現時点(2023年12月)は事業化していく上での実行可能性の検証とモデル修正を行っている。産学官連携による開発プロジェクトを通じて、ゼミ生達は、行政の立ち位置や、沼田町の事業者の考え方、あるいは事業化を進めるためのプロセスを学ぶことができた。学生だけで行うゼミ活動とは違って、社会実装の難しさと創造的作業の楽しさを体験できる貴重な機会となった。

学生研修記

柿崎 綾

地域経済学科 2年
釧路北陽高校出身



櫻田 笑瑚

地域経済学科 3年
札幌清田高校出身



沼田町における着地型観光の新たな企画提案

私たちは着地型観光の先行事例を学び、沼田町での着地型観光の新たな企画・提案をして実際に社会実装を目指すという取り組みを「GAROO」「まちづくりぬまた」等の協力のもと学生中心に行ってきました。ワークショップの経験を経てゼミの中で4グループに分かれて沼田町観光資源の商品案を計画しました。沼田町の貯蔵雪の有効活用や真夏なのに雪という話題性を見込んだ真夏の雪中サウナや沼田町の特産品であるトマトを使ったトマト祭り、豪雪地帯である沼田町の雪をかまくらに利用しライトアップするかまくら祭り、広大な自然を活かした自然教室など多くの商品案を計画しました。私のグループでは自分たちが実際に楽しかったアクティビティとSNS発信を組み合わせた「バズり体験ツアー」を提案しました。このプロジェクトは2年間の期間で行うものであるため、事業化に向けて地域研修で見つけた課題を解決していき、次年度の活動につなげていきたいです。

地域研修を振り返って提案

今回私達はGarooというコンサルタント会社にサポートを受けながら、我々学園生が考えた提案内容をブラッシュアップし、最終的に着地型観光モデルとして納品するという取り組みを行いました。本研修の目的は学生らが沼田町の着地型観光モデルを考え、着地型観光モデルを提案するという事でした。今回のプロジェクトは2年間かけて行われ、来年度も引き続き今プロジェクトに取り組んでいきます。フィールドワークから見つけた課題として沼田町の認知度の低さが挙げられました。解決策として4つの班に別れてそれぞれの観光モデルを考案し、市の職員の方々の前で発表しました。提案内容を更に現実的なものにする為、市の職員の方々の目線を見た厳しい意見を頂きました。実際に市の職員の方々とお話しする機会を設けて下さり、非常に貴重な体験になりました。来年度もこの取り組みは続いていくので、ぜひ、学生視点の着地型観光モデルを実現してほしいです。

2部

西村宣彦ゼミ I・II

濱田武士ゼミ I・II 合同研修

参加学生数 16名 [西村ゼミ8名、濱田ゼミ8名]



西村 宣彦

地域経済学科
教授

濱田 武士

地域経済学科
教授

豊浦町の移住政策と空き家対策——空き家と残置物の調査

研修地：豊浦町

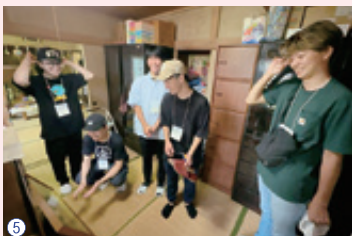
●研修目的

都市・地方を問わず、空き家の増加が地域課題になっている。一方、豊浦町では移住者向けの住宅不足も課題となっている。空き家流通の阻害要因になっている空き家内部の残置物に焦点を当て、基礎的データを収集するための調査を探索的に実施し、今後の空き家対策のあり方を考えた。

研修先・日程

- 9月5日 豊浦町役場でレクチャー
空き家調査（1日目）
町長からの激励
振り返りのミーティング
親睦交流会
- 9月30日 空き家調査（2日目）
振り返りのミーティング

写真①②⑤⑦⑧⑨空き家残置物の調査。③レーザー測定器で敷地を測定。④空き家調査。お宝発見！？⑥調査を終えて豊浦海岸に夜散歩。⑩豊浦町役場でレクチャー。⑪豊浦町長の講話。⑫豊浦町長の前で調査の振り返り。⑬合間に昼食。



●総括

本研修は、北方建築総合研究所（旭川市）、豊浦町、西村・濱田ゼミの3者の協働事業として実施した。最初に豊浦町役場を訪問し、同町のまちづくりや調査手法のレクチャーを受けた。空き家調査では、空き家所有者の許可を得た15の物件を、3班に分かれて巡回し、①敷地調査と②残置物調査を行った。①敷地調査では空き家の敷地を簡便な方法で測量してラフ図を作成し、写真も撮影した。②残置物調査では空き家内部に入って、残置物を1点1点調べて写真を撮影し、事前に準備したArcGISの調査フォームアプリ「Survey123」を用いてスマホで入力・送信し、データベース化した。調べた残置物の数は282に上った。

空き家内部の残置物を調べる学術的な調査は前例がなく、調査方法も含めて手探りで実施したが、調査の効率化に向けた改善点も含め、多くの有益な示唆を得ることができた。今回の調査結果を空き家の流通促進につなげていくには、各物件の残置物の純処理コストを推計するなど、さらに深掘りした調査や実践経験を蓄積する必要がある。またリサイクル業者や不動産業者などとも協働し、公民連携の仕組みづくりを構築していくことが重要と思われる。お世話になった関係各位に感謝申し上げます。

学生研修記



山本 幸一

地域経済学科 2年
札幌大通高校出身

太田 樹

地域経済学科 3年
佐呂間高校出身

豊浦町の空き家対策・活性化に向けて

今回私たちは豊浦町に訪問させていただき、「移住対策と空き家対策」をテーマに活動を行いました。その中でも空き家の敷地を図りラフ図に書きこむのと、残された家具の大きさを図り種類を分類するため、ArcGISのSurvey123というアプリケーションを活用しデータとして記録していくことを重点的に行いました。まず、今回の空き家の内部に立ち入る調査は全国的にも例がなく試験的な部分も多くありましたが、豊浦町役場の方々や北総研の方々の協力もあり調査を行うことができました。空き家の状態は様々で、片づけや改装をすれば住める空き家もありましたが、状態が酷くすべて取り壊しをしなくては住めない空き家もありました。また、残置物は十分に使用可能なものが半数でタンスやテーブルなど家具の割合がほとんどでした。

今回の調査を行うことで、自治体と空き地所有者の繋がりのきっかけとなり、今後の活用の仕方について考えられる良い機会だったと実感しました。

全国的にも例がない空き家内部調査について

私たちは豊浦町の移住政策と空き家対策をテーマに調査を行いました。ここで空き家内部に立ち入った学術的な調査というものは、全国的にも例がなく、課題点がたくさん出てきました。しかし、前例がないからこそこれからも調査が必要だと思いました。現状空き家は数多く存在しているのに対して、多くの移住希望者が待機状態となっているので、空き家流通のためにも民間企業などの協力が必要なのだと感じました。続いて調査をして気づいたことは、空き家内部に存在している残置物の状態が全体を通して非常に良かった点です。冷蔵庫やベッド、タンスといった生活必需品が残っていたりして、中にはすぐにも住めそうな空き家もありました。それ以外にも、壺や着物といった価値のあるものもあり、調査してとても楽しかったです。

最後に私たち以外にも、室蘭工業大学や役場の皆さんの協力があり、今回の調査ができたと思います。ありがとうございました。

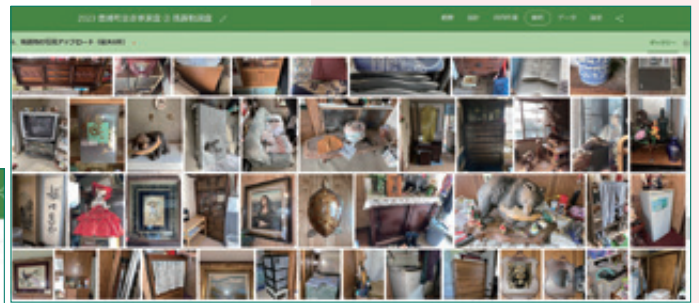
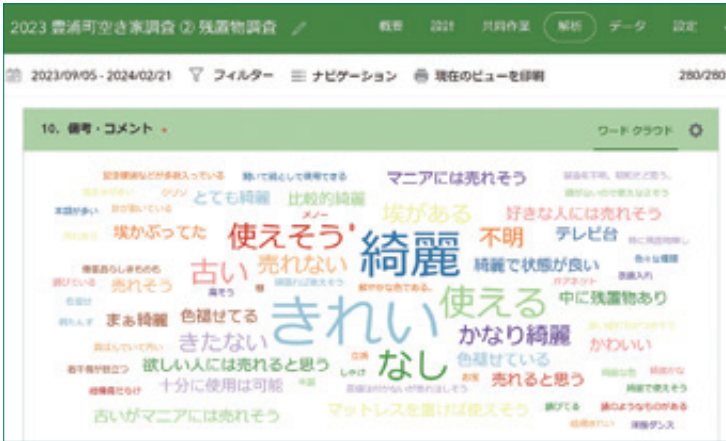


高台にある豊浦町役場前で

図4 空き家敷地図



図1・2・3 残置物調査結果(左:コメント、右上:アップロードされた残置物の写真、右下:残置物一覧)



2023 豊浦町空き家調査 2 残置物調査	検索	設計	共有作業	解除	データ	設定
2023/09/05 - 2024/02/21	フィルター	ナビゲーション	現在のビューを印刷	280/280		
10. 備考・コメント						
2023/11/6 19:32	調査地	種類	その他	状態	備考・コメント	
2023/11/6 19:32	調査地	種類	その他	状態	備考・コメント	
2023/11/6 19:32	調査地・様子	種類	その他	状態	備考・コメント	
2023/10/26 11:31	調査地	種類	タンス	状態	備考・コメント	
2023/10/26 11:50	調査地	タンス	状態	備考・コメント		
2023/10/26 11:50	調査地	タンス	状態	備考・コメント		
2023/10/26 11:50	調査地	タンス	状態	備考・コメント		
2023/10/26 11:54	調査地	タンス	状態	備考・コメント		
2023/10/26 11:29	調査地	タンス	状態	備考・コメント		

学生研修記

高宮 成生

地域経済学科2年
雄武高校出身



佐々木 哉斗

地域経済学科3年
北海道えりも高校出身



研修を終えて

今回私たちは豊浦町を訪れ、人口減少に伴い増え続けている空き家の実態を調査し、その調査を元に豊浦町の移住政策と空き家対策についてまとめました。この研修で私は実際に現地に足を運んで調査することの大切さを学ぶことが出来ました。

研修前の事前調査の時点では町の産業や特色など基本的な情報を調べて豊浦町を少し知った気になっていました。ですが実際の研修では空き家問題のことはもちろん、散策を通して町の立地、住宅街から商業施設までの通いやすさを自分自身で体験して知ることができ、車を所持していない方の移動手段や高齢者の日常生活で支障をきたしそうな箇所はないかなど細かいところまで目を配り調査することができました。そして日々問題に向き合っている役場の方に、移住政策に対する想いや課題解決への苦労などの生の声を聞くことができ、意見を交換することができたのが地域に足を運んで調査した大きな成果となりました。

空き家問題解決による移住者獲得

今回の地域研修は、豊浦町で空き家調査を行いました。この調査は空き家の流通促進を目的として行いました。調査方法は昨年同様、ArcGISを活用し空き家の状態、残置物の質・量、敷地の状態を調査しました。実際に空き家の中を見て、やはり手入れのされていない空き家は、老朽化が進んでおり、リフォームや立て直しをしなければ空き家をそのまま有効活用するのは難しいというのが個人の感想です。また、長く放置されているため景観も損なわれていました。ただ、残置物についてはまだまだ使えそうなものもあったので、こちらを有効活用することは可能であると思いました。

現在、豊浦町は多くの移住希望者が待機しており、街の雰囲気もどこか懐かしさを感じる良い場所であるため、空き家問題を解決し、住居の確保ができれば移住者希望者の待機も減らすことができ、さらに新規の移住者獲得につながると考えました。

図5 Survey123 残置物調査フォーム



1部・2部 平野研ゼミ I・II

参加学生数 28名
(行政班12名、海外班8名、企業班8名)



平野 研
地域経済学科
教授



地域研修報告会に向けてコンピュータ実習室にて

札幌市におけるフェアトレード活動と課題

研修地：札幌市

●研修目的

2019年に札幌市が日本で5番目にフェアトレードタウンに認定され、北星学園大学と札幌学院大学が同時にフェアトレード大学に認定された。市民運動・行政・企業の連携で拡大してきた札幌市におけるフェアトレード運動の過程を調査する。その中で認知の問題などの課題について考察していく。

研修先・日程

行政班>	
8月28日	フェアトレードフェスタinさっぽろ実行委員会・萱野智篤さん(オンラインインタビュー)
	北星学園大学教授・萱野智篤さん(オンラインインタビュー)
8月30日	ほっかいどうピーストレード・東由佳子さん
9月4日	市役所国際部・林さん・伊藤さん
9月6日	環境プラザ・木下涼美さん
メール対応	札幌学院大学教授・橋長真紀子さん
海外班>	
8月28日	北星学園大学教授・萱野智篤さん(オンラインインタビュー)
9月5日	フェアトレードタウンさっぽろ戦略会議・有坂美紀さん
9月6日	石屋製菓・亀村建臣さん(広報CSRチーム所属)
9月24日	JICA北海道・桐山あす美さん(開発教育担当)
10月3日	北海学園大学准教授・牛久晴香さん
海外班>	
8月24日	北海道銀行・津村さん(経営企画部サステナビリティ推進室)
	北洋銀行・川根さん・対馬さん(経営企画部サステナビリティ推進室)
9月7日	フェアトレード雑貨&レストラン「みんなたる」和田美加代さん
	クロスホテル札幌・柏崎摩利子さん
メール対応	北海道テレビHTB・渡辺学さん・上原みゆきさん

写真①JICAフェアトレードコーナー。②JICAレストランカフェ「地球こうさてん」ランチ。



●総括

本地域研修では、札幌市のフェアトレードタウン認定に至る過程を「行政班」「海外班」「企業班」に分けて、多角的に調査を行った。各班では、それぞれに調査目標を立て、調査先を選定し、インタビューやメールなどで調査を行った。以下では班ごとにその成果について総括していく。

①行政班 フェアトレードタウン認定への申請にはフェアトレード推進団体と、自治体の担当窓口との連携を欠くことができない。認定の手順や基準について、札幌市国際部から聞き取り調査を行い、6つの認定基準に示されている、「フェアトレード商品認定」や「専門店」、「広報活動」「地域活性化の取り組み」などについて調査先を選定し、聞き取り調査を行った。「地域活性化」としては、北星学園大学、札幌学院大学のフェアトレード大学認定校についても調査対象を拡大し、若者のフェアトレード活動への取り組みについても調べることができた。基準6に該当する、市議会や市長への調査も試みたが、今回は実現には至らず、今後の課題となった。

②海外班 海外でのフェアトレードの実態について調査を行う予定ではあったが、実際に現地を訪問することは難しかったため、札幌市内の団体・個人で、外国との生産につながりがあり、フェアトレードに関連しているところを中心に調査を行った。JICA北海道や本学の牛久先生から実践的な興味深い話を聞くことができた一方で、SDGsの認知度が高まっていることにより、企業などの関心がフェアトレードではなく、環境問題などを含んだより幅の広いSDGsに移りつつあることを

学生研修記



佐藤 結奈
地域経済学科2年
小樽潮陵高校出身

フェアトレード商品の生産国からの視点

平野ゼミではフェアトレードをテーマとして、行政・企業・海外の3つのグループに分かれフェアトレードタウンである札幌市で地域研修を行いました。

私は、海外のグループに属し「フェアトレード商品の生産」の視点で調査しました。しかし、実際にフェアトレード商品の生産をする国で現地調査を行うことはできないため、情報収集に苦労しました。それでも、フェアトレード商品を生産する国の調査をしている教授にお話しを伺うことで生産国側について学ぶことができました。

フェアトレードによる生産国のメリットは、品質基準があることによる生産技術強化とフェアトレード商品以外の価格の上昇です。デメリットは、フェアトレード商品の生産が多いアフリカは、生計多様化の生活であるためフェアトレード商品の生産に多くの時間を割くことが難しく、品質基準の設定や出荷期限の存在は生産者にとって、気がかりになるときもあることです。



森田 幸汰郎
地域経済学科2年
滝川西高校出身

企業が取り組むフェアトレード

私は企業班として、地域に根差しお客様との距離が近い「みんなたる」と、全国・海外からも多く利用する「クロスホテル札幌」に訪問させていただきました。

「みんなたる」は店内にはカフェと雑貨があり、フェアトレードを知ってもらうための活動として、みんなたるを講演会や音楽をする場としても提供し、若者の関心を高めるために学祭やマルシェなどのイベントにも積極的に参加しています。フェアトレード商品を扱うようになった経緯、フェアトレードに対する考え方など経営者の方に直接聞くことができたのはとてもいい経験になりました。

「クロスホテル札幌」ではフェアトレード商品を体験できる宿泊プランがあり、ワイン、おつまみなどを提供しています。フェアトレードマーケットを開催した際には、「みんなたる」と協力し販売を行いました。

業態の異なるふたつの店舗を訪問することで個人営業と大企業のフェアトレードに対するアプローチ方法の違いを見ることができました。個人営業では専門店として品ぞろえの良さや、必ずしも収益を追求しない故の事業への手の伸ばしやすさが挙げられ、大企業には幅広い広報・PR活動、他企業を巻き込んだ規模の大きい事業を行えるなどの利点があり、それぞれ違う角度からフェアトレード活動を行っていることがわかりました。



フェアトレードフェスタ in さっぽろ 2023会場 [6月24・25日 札幌市民交流プラザSCARTS]

写真③フェアトレードフェスタ in さっぽろ 2023 展示。
④フェアトレード雑貨&レストラン「みんなる」。⑤「クロスホテル」インタビュー。⑥環境友好雑貨「これからや」外観。⑦「これからや」東さん。⑧これからや雑貨。

知ることができた。今後、現地での調査やSDGsを含めたより幅広い調査の可能性について、にしきをひろげることができた。

③企業班 当初は「専門店」などの市内小売店の調査からスタートしたが、検討していく中で、「大規模店」や「地元金融機関」の重要性に気づき、調査対象を広げていった。全国展開を行う「大規模店」の調査は、調査先へのアポイントなどの準備時間が足りず、インターネットでの情報収集にとどまってしまったのが残念ではあったが、専門店などとの違いについて考察を行うなど、自分たちで問題を整理して考察していくことができた。また、金融機関についてはESG投資や私募債などについても調べ、その事例についても調べていったが、フェアトレードの事例とは言えなかったため、地域研修報告会では最小限にとどめざるを得なかったのは残念である。しかし、フェアトレード私募債の提言など独自の提案を出せたことは今後の研究にもつながるものであった。

いずれの班でも、札幌市でのフェアトレード認知度の低さの問題が指摘された。それは認知度の低さを嘆くだけのものではなく、行政や市民、企業のそれぞれに地域活性化の一つの手段としてのフェアトレード拡大について考えていくものであったと言える。本大学の中での取り組みなど、次への研究課題について考える機会となった。



学生研修記



坂本 蒼汐

地域経済学科3年
北海学園札幌高校出身

地域研修を終えて

私たちはフェアトレードが多くの人に知ってもらうためにはどうすればいいのか、フェアトレードタウンに認定された札幌市にはどういった課題があるのかを行政班、企業班、海外班に分かれて直接取材、メールなどで調査を行った

調査結果としてはやはり行政、企業、市民の3つの協力が必要不可欠だとわかった。フェアトレードのイベントはまだ小規模なイベントがほとんどで認知度が低いのが現状だった。そのため、大規模なイベントを大通り公園などで行えば、たくさんの人に知ってもらえることができると考えた。

私自身は行政班で様々な団体にお話をお伺いしたが、やはり全体的にフェアトレードの認知度という点に課題があり、また若者への期待の表れがあった。私たちができることはイベント、市民団体へ積極的に参加はもちろん、フェアトレードについて学びに行くという姿勢が必要だと考えた。



田中 康平

地域経済学科3年
北海高校出身

企業のフェアトレード活動についての学び

私たち平野ゼミでは「札幌市におけるフェアトレードの活動」をテーマにして、行政班・海外班・企業班の3つの班に役割分担をして研修を行いました。

私は企業班に所属し、小売店やメディア関係、銀行のフェアトレードの活動についてインタビュー調査をしました。訪れた「環境友好雑貨 これからや」さんでは、代表の方にフェアトレード活動に取り組んだきっかけや現在の営業状況、札幌市でのフェアトレードの大イベント「フェアトレードフェスタ」についてのお話や、今後のフェアトレードへの展望などをお聞きしました。このようなフェアトレードについてのためになるお話をとらえて、調査結果をまとめたところ、企業班では小売・メディア・銀行の各業界ではフェアトレード活動に取り組んでいるものの、業界間のつながりが薄いことからフェアトレードの認知度が高まっていないのではないかという結論に至り、それぞれが同じ商品にアプローチをかけてより良い製品の開発が必要という考えを持ちました。また、ゼミ全体としては行政のフェアトレードイベントの支援、企業の宣伝・広報活動・市民の積極的参加と理解が重要であり、この3つの協力がフェアトレードの発展には不可欠であると考察しました。



1部 藤田知也ゼミⅠ

参加学生数 14名



藤田 知也

地域経済学科
准教授



19世紀ホールの蒸気機関車の前で

京都観光におけるオーバーツーリズムの実態

研修地：京都府京都市・亀岡市

● 研修目的

アフターコロナで観光需要が高まる中、京都では「オーバーツーリズム」の問題を抱えている。本研修では、インバウンドの利用比率の高い嵯峨野観光トロッコ及び京都市内を中心とする観光資源を訪問することで、オーバーツーリズムの現状と問題点及びその解決策を探る。

研修先・日程

9月5日 嵯峨野観光鉄道の方による講演、
嵯峨野観光トロッコ視察

9月6日 清水寺、金閣寺、伏見稲荷

● 総括

1部藤田ゼミⅠの地域研修は京都で実施した。京都はコロナ禍前から「オーバーツーリズム」と呼ばれる問題を抱えており、アフターコロナとなった今、再び「オーバーツーリズム」が取り沙汰されている。

はじめに、嵯峨野観光鉄道の方に講演をしていただき、京都の観光資源の1つである嵯峨野観光トロッコの歴史や特性などを学んだ。トロッコ列車の利用者属性はインバウンドが半数以上を占めていることから、京都ではオーバーツーリズムが課題とはいえ、多くのインバウンドは本社にとっては重要なものであった。講演後は実際にトロッコ列車に乗車し、鉄道資源が観光資源として活用されていることが分かったと思う。

2日目は京都市内の主たる観光地を視察した。多くの観光客が訪れることは決して悪いことではなく、観光消費を通じた地域経済の活性化に繋がる。しかし、観光客の受入許容量を超えることにより、バスの混雑や景勝地や文化財のある地域における景観の悪化に繋がることから、京都が抱えている観光に係る問題を直接確かめることができただろう。

最後になりましたが、嵯峨野観光鉄道の有川様と高本様には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

学生研修記

観光客がもたらすオーバーツーリズム

私たちは今回の地域研修で、誰もが一度は耳にしたことがある「オーバーツーリズム」について学ぶために京都府を訪れました。

今回の地域研修では、京都の観光名所ともいえる金閣寺や清水寺、伏見稲荷大社などに研修に行きましたが、どの場所も大半が外国人観光客で占めていました。しかし、外国語を話せないスタッフも多く、お金のやり取りや案内がうまく伝わっていない場面も見かけられました。また観光客が多いことから、自分たちのペースで回ることができなかったり、写真を撮ろうとしても、他の観光客が必ずと言っていいほど映り込んでしまうなどの景観が損なわれてしまう場面も見受けられました。

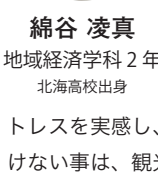
現在、コロナがだんだん終息してきて、観光客が各地において増加してきています。だからこそ、今一度オーバーツーリズムについて見つめなおし、景観を損なわない観光地づくりを目指していく必要があると感じました。

京都におけるオーバーツーリズムについて



田中 萌絵

地域経済学科2年
札幌白石高校出身



綿谷 凌真

地域経済学科2年
北海高校出身

私たちは今回の地域研修のテーマを京都におけるオーバーツーリズムに決め、京都府を訪問しました。オーバーツーリズムとは、観光地で訪問客の著しい増加が、市民生活や自然環境、景観などへの負の影響をもたらしたり、旅行者の満足度も大幅に低下させたりするような観光の状況のことを指し、日本の代表例として京都市が挙げられます。実際に行ってみて、交通機関の混雑や景観が損なわれているという点だけでなく、外国語対応の問題などのオーバーツーリズム以外の問題なども身をもって体感することができました。実際に京都のバスを利用することで、京都の市民が日常で感じるであろうストレスを実感し、早急な解決が不可欠な問題だと強く考えさせられました。今回の研修を通して忘れてはいけない事は、観光客が多いことは決して悪い事ではなく、むしろ喜ばしいことだということです。今後もゼミで研修で得た経験に基づき、問題解決のための考えを深めていきたいです。

写真①嵯峨野観光鉄道の方による講演。②地元利用も多いバス。③嵯峨野観光トロッコから手振り。④トロッコ亀岡にて。⑤仁和寺。⑥錦市場。⑦混雑路線として有名な206系統。



1部

藤田知也ゼミⅡ

参加学生数 12名



藤田 知也

地域経済学科
准教授

1部ゼミⅡメンバーでの集合写真

路線バスの需要喚起を目的とした路線バス
ツアープランの作成

研修地：石狩市

●研修目的

本研修は石狩振興局の地域政策推進事業における取り組みとして「石狩地域における公共交通の需要喚起」をテーマとした企画・提案を行うものである。ゼミで検討した石狩市への路線バスツアープランを実行、ブラッシュアップし、路線バスを活用したツアープランの立案を目指す。

研修先・日程

- 9月18日 サーマンファクトリー、砂丘の風資料館、旧長野商店、あそびーち、あいーど厚田、マウニの丘
- 9月19日 はまなすの丘ビジターセンター、石狩市観光センター、石狩弁天社、石狩市役所

写真①刺身定食（お食事処前浜）。②お食事処前浜にて。③はまなすの丘ビジターセンター。④石狩市役所に訪問。



●総括

1部藤田ゼミⅡでは、石狩振興局とタイアップし、振興局の地域政策推進事業「いしかり・ライフstyle 魅力発信・若者定着促進事業」における取り組みとして、「石狩地域における公共交通の需要喚起」をテーマとしたバスツアープランの企画・提案を行うための地域研修を行った。路線バスの利用促進を観光の視点を取り入れて行うこととなり、石狩市の観光資源を訪問するバスツアープランを立案し、実際に地域研修でツアープランを実行したが、当日は悪天候に見舞われ、全てのグループで当初の予定通り進まなかった。しかし、急遽行き先を変更したことで、事前にもリサーチできていなかったお店に訪問できたグループもあるなど、現地で石狩市の魅力に触れつつ、バスツアープランの計画策定を進めることができた。

また、実際にバスツアープランを試したことで、路線バスが抱えている課題や観光利用の促進のためにバス事業者が実施できそうな取り組みを発見することもでき、かなり実践的な地域研修となった。

最後になりましたが、石狩振興局長岡様、島様、高田様、石狩市の芳賀様、中村様には地域研修前の計画立案の時から大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。



石狩弁天社

学生研修記

地域の公共交通を守るために

私たちは石狩振興局とのタイアップ企画として「公共交通の需要喚起を図る提案」をテーマに、石狩市の路線バスに着目して地域研修を行いました。

石狩市や路線バスに限らず、地域の公共交通が衰退してしまう事態は深刻な問題になっています。地域の公共交通を維持していくためには、需要を増やすことも重要な対策のひとつであり、地域住民だけではなく周辺地域の人々の需要も増やす必要があります。

内山 紗翠

地域経済学科3年
札幌月寒高校出身

本研修では、石狩市への人の流れをつくることを目的として、石狩市の路線バスを利用して石狩市内の観光スポットを巡るバスツアー案を企画し、実行しました。実際に路線バスを利用したことで、路線バスのメリットもある一方、解決が難しい課題があることも分かり、当初企画したバスツアーだけでは路線バスの需要喚起が難しいという結論に至りました。そのため、バス会社や地方公共団体だけではなく、石狩市内のお店や施設とも協働することを前提とした、路線バス利用者を増やす解決策を石狩振興局へ提案しました。

地域の公共交通を維持していくためには、観光業との結びつきも不可欠です。多様なツーリズムがあるなかで、その地域の魅力をどのように最大限に活かせるかを考えていくことも、地域の公共交通を守っていくうえで求められます。

地域研修で見た公共交通の課題と成果

私たちは石狩市振興局からの依頼を受け、同市の路線バスの需要拡大を促す施策を提案しました。具体的には観光の側面からアプローチし、路線バスで巡ることができる観光バックを作成しました。施策提案にあたって、課題先進地域とも呼ばれる北海道らしい様々な課題に直面しました。しかし、現地調査を通して光明も垣間見えました。それは地方の魅力の発見です。まだ見ぬ魅力的な施設や飲食店が並び、地元住民のぬくもりを感じることができました。

泉 湧大

地域経済学科3年
札幌平岡高校出身

石狩市が直面している諸課題は全国の地方も同時に抱えている問題でもあるため解決は困難を極めます。本研究はおそらく「一事業体による解決は難しい」という結論に帰着すると思われます。しかし、北海道には私たちが体験したような未開の力が眠っているため、今後の動向に目が離せないのも事実です。私たちの提言が今後の石狩市、そして北海道の未来をより発展させる手助けになればと思います。

2部 藤田知也ゼミ I・II

参加学生数 8 名



藤田 知也
地域経済学科
准教授



サロベツ原生花園のデッキにて

沿線地域から見る宗谷線の観光利用の推進

研修地：豊富町・幌延町・美深町

● 研修目的

本研修では宗谷本線沿線の観光資源ならびに、宗谷本線の特急停車駅と廃止が検討されている駅を訪問する。そして、沿線観光資源の利活用や、宗谷本線の駅を中心とした周囲の状況を実際に見ることで、今後の宗谷地域の在り方について、公共交通機関と観光の両方の側面から探る。

研修先・日程

- 9月13日 トナカイ牧場、豊富町役場、サロベツ湿原センター
- 9月14日 ゆめ地創館、雄信内駅、トロッコ王国美深

写真①トナカイにエサやり体験。②豊富町役場で講演。③サロベツ湿原センターからの夕陽。④ゆめ地創館のエレベーター。⑤雄信内駅。⑥大雨のトロッコ体験。⑦トロッコ王国美深の方の講演。



● 総括

2部藤田ゼミ I・II では、宗谷本線の沿線地域にスポットライトを当て、豊富町・幌延町・美深町を訪れた。豊富町では町の特性や観光資源に関する講演をしていただき、幌延町ではゆめ地創館などの観光施設と秘境駅の1つである雄信内駅を訪問、美深町ではトロッコ王国美深を訪れ、トロッコの乗車体験と運営主体であるNPO法人の方に講演をしていただいた。

宗谷本線は利用客が少ない赤字路線である。地域輸送としての役割を高めることは沿線人口からして現実的とは言えず、利用促進の打開策を観光利用に求めた。沿線の観光資源との連携を踏まえた上で打開策を検討するために本研修を実施したが、宗谷本線の駅から各観光資源へのアクセスの悪さ（二次交通が充実していない）が改めて浮き彫りとなった。しかし、裏を返せば伸びしろがあるとも指摘でき、豊富町の豊富温泉など唯一無二の観光資源もあることから、それを上手く活用できる方向性を模索することで、宗谷本線の観光利用の創出に繋げることができるのではないかとと思われる。

最後になりましたが、豊富町長の河田様、豊富町役場の小林様、トロッコ王国美深の野村様には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

学生研修記

宗谷線地域を訪ねて実感した今後の課題



柿崎 由子
地域経済学科 2年
札幌東商業高校出身

現在、北海道北部に位置するJR宗谷線地域では地域の過疎化・人口減少が進み、宗谷本線自体の存続も危ぶまれるという厳しい状況に陥っています。

そこで、今回の地域研修で私たちは、「宗谷線地域からみる宗谷本線の観光利用の推進」を研修テーマとして、豊富町・幌延町・音威子府村・美深町を訪れました。

主に滞在した豊富町では、豊富町役場を訪問し、役場の方や町長さんから豊富町の現状や今後に向けたお話を伺うことができ、豊富町の貴重な観光資源のひとつでもある豊富温泉も体験することができました。

宗谷線地域のように、地域の過疎化・人口減少などによって厳しい状況に陥っている地域は、北海道だけでなく、日本の各地に存在していると思います。そのような地域を様々な角度・視点から見つめ直し、いかに活性化させていくかを考えていくことが重要だと実感しました。

沿線地域の現状の把握と観光資源の再確認



棧敷 洸
地域経済学科 3年
札幌平岡高校出身

宗谷本線は沿線地域の人口減少や観光需要の伸び悩みによって利用者が減少傾向にあります。沿線40駅のうちJR北海道は16駅の廃止を検討しており、今年度末で2駅の廃止が決定しています。わたしたちはこの現状把握と新たな解決策を検討すべく、地域利用と観光利用ふたつの観点から現地調査による研修を行いました。現状は私たちの想像をはるかに上回る地域衰退が進行しており、この状況が是正される見込みはなく、JR北海道が路線を単独維持することが困難である実情を理解できました。私たちはこの結果を踏まえ、既存の観光資源の新規活用による観光利用の増加策を検討し、観光から派生した地域定住を目指すことによって地域利用を回復させる方針で話し合いを進めました。現地では雄大なサロベツ原野の夕景やご当地グルメを堪能し、温泉旅館に宿泊することで地方ならではの魅力を肌で感じ、充実した研修期間を過ごすことができました。

1部 古林英一ゼミⅠ

参加学生数 12名



古林 英一
地域経済学科
教授



有珠山火山原展望台にて

火山との共存

研修地：洞爺湖町

●研修目的

研修では火山の恩恵と防災について種々の施設を見学し、火山との共存の実態と課題を明らかにすることを目的とした。

研修先・日程

- 9月4日 洞爺湖町文化センター
散策路（西山山麓ルート）
- 9月5日 有珠山、伊達市防災センター
火山科学館

●総括

道内有数の観光地である洞爺湖町は世界ジオパークの中心である。活火山である有珠山は最重要の観光資源であるが、その反面、これまでも火山噴火で大きな被害を受けてきたことも見逃せない。当初、最初に洞爺湖町の職員から町の概要やジオパークについてレクチャーを受けることが予定されていたが、担当者のコロナ感染によりレクチャーが急遽中止となってしまったため、研修内容がやや乏しくなってしまったことは否めない。

学生は火山の自然と防災の2グループにわかれ、それぞれ自発的に計画した訪問先を訪れ研修をおこない、報告会に向けてさらに文献調査等をおこない十分な成果をあげることができた。



地域研修報告会（12月17日）

学生研修記

作田 昌暉

地域経済学科 2年
札幌平岸高校出身



上田 有真

地域経済学科 2年
滝川高校出身



楽しかった地域研修

私たちは火山との共存という観点で、洞爺湖、有珠山周辺に行きました。20年周期という短いスパンで噴火する火山に対し、地域の方々の防災の様子、噴火が与える地域への影響などを目で見、肌で感じることで普段することのない経験を得ることができました。

防災センターで資料をみたり、いくつかの登山道を実際に歩き、ポコポコに隆起した道や廃墟となった幼稚園などからは噴火の恐ろしさを感じられ、対策することの必要性が理解でき、今後の火山活動に対して注目していきたいです。

火山との共存

私たちのゼミでは、地域研修で支笏洞爺国立公園を訪れました。洞爺湖、日本で3番目に大きいカルデラ湖であり、有珠山などの山々と深く関わる火山活動について学びました。火山活動から得られる観光業などの利点と、自然災害などの課題を含む自然との共存について考える機会となりました。金比羅山麓散策路を歩き、2000年の有珠山噴火の跡を目にすることで、自然災害の脅威を実感しました。

この研修を通じて、火山活動がもたらす恩恵と人々の生活を脅かす自然災害について学びました。自然との共存を実現するためには、さまざまな問題に対処する必要があることを感じました。

写真①噴火で倒れた電柱。②噴火で損壊した国道。
③噴火災害遺構の標識。④噴火で損壊した家屋と自動車。
⑤噴火で埋もれた道路標識。⑥有珠山頂上。
⑦噴火で損壊した幼稚園。⑧防災センターでの消火体験。



1部 古林英一ゼミⅡ

参加学生数 12名



古林 英一
地域経済学科
教授



昭和新山山麓

洞爺湖町観光の問題点と展望

研修地：洞爺湖町

●研修目的

研修では道内有数の観光地である洞爺湖町で観光の現状と課題をテーマとして、種々の施設を見学した。

研修先・日程

- 9月4日 洞爺湖町文化センター、散策路（西山山麓ルート）
- 9月5日 有珠山、火山科学館、中島
- 9月6日 グリーンステイ洞爺湖

●総括

当初、最初に洞爺湖町の職員から町の概要やジオパークについてレクチャーを受けることが予定されていたが、担当者のコロナ感染によりレクチャーが急遽中止となってしまったため、研修内容がやや乏しくなってしまったことは否めない。

グループにわかれ中島など主要な観光施設を訪問し、実際にキャンプ施設等を利用することで観光地としての課題とその解決策を考察し、報告会で発表をおこなった。



有珠山山頂から見た洞爺湖

学生研修記

写真①噴火遺構西山山麓ルート。②噴火口。③散策路からみた伊達市街。④洞爺湖花火。⑤外国人宿泊客。⑥有珠山山頂。⑦グリーンステイ洞爺湖。



清川 芽依
地域経済学科3年
札幌創成高校出身



地域研修を終えて

今回私たち古林ゼミは、活火山（有珠山）が与える洞爺湖町への経済効果を研究することを目的に洞爺湖町へ地域研修に行きました。

有珠山の噴火による被害について事前に学習していましたが、洞爺湖有珠山ジオパークで実際に町道を横切った断層や火口列、隆起で形成された地溝、折れた電柱、幼稚園やバスがそのまま残っているのを目にし、想像以上だったことからその被害の大きさを実感しました。これだけ被害が大きかったにも関わらず、2000年の噴火による犠牲者が出なかった洞爺湖町だからこそ噴火災害遺構を壊さずに残り、観光資源や防災教育として活用できているということが分かりました。

噴火災害遺構が実際に残っているのは世界的にも貴重であり、名所として知られることで観光客や登山家、自然愛好家などの来訪者が増加し、それによって洞爺湖町のホテル、ガイド、レストランやお土産店など観光業としても成長することで経済効果をもたらしていることが分かりました。調べるだけでは得られない情報や現地の雰囲気を感じ、防災の意識を高めることもでき、とても有意義な研修になりました。

岩淵 由真
地域経済学科3年
室蘭清水丘高校出身



地域研修で感じたこと

私たちはジオパークに登録されている洞爺湖町を訪れました。実際に現地を歩き、体験していくと綺麗な自然だけでなく、かつての国道を遮るように噴火した跡に枕木を並べた散策路や階段状になっているアスファルト、熱泥流が流れ込んだ公営浴場や公共住宅や被害を受けた幼稚園跡がそのまま保存されているなど噴火災害遺構をたくさん見ることが出来ました。写真でみるだけではわからない迫力がありました。本来であればこのような遺構は残さないようですが住民の方々の意向で防災教育や観光資源として残してあるそうです。

私たちが普段何気なく見ている風景も長い年月をかけて作られたものだと感じました。また、洞爺湖町は火山の噴火が起こる場所ですが、人々が暮らし続けるのには理由があることが分かりました。事前学習でも調べていたことではありますが、湧水を利用した耕作や果樹園、噴火で温泉水が湧出しようまれた温泉観光など火山から様々な恵みを得られることが暮らし理由になっていることが分かりました。

今回の研修で本やインターネットで理解できる知識では知ることのできない情報やいかにわからない雰囲気を知ることが出来ました。



2部 古林英一ゼミ I・II

参加学生数 6名



古林 英一
地域経済学科
教授



フレベの滝近くにて

野生生物との共存

研修地：斜里町

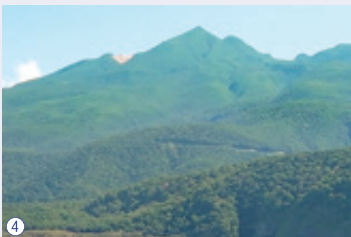
●研修目的

近年、野生生物との共存が各地で問題になっている。今年度の研修は世界自然遺産として海外からの観光客も多い知床において、野生生物との共存がどのようにおこなわれているかを知ることを研修目的とした。

研修先・日程

9月15日 知床自然センター、
知床五湖散策路、斜里漁協
9月16日 観光船乗船

写真①知床五湖散策路。②知床五湖。③斜里漁港。
④海から見た羅臼岳。⑤オンコシンの滝。



●総括

知床は海と陸の生態系が一体となっていることが世界自然遺産に認定された大きな理由であるが、その一方で、陸域ではヒグマやシカ、海域ではトドといった野生生物と産業や人間社会との共存が恒常的な課題となっている。とりわけ2023年はクマの被害が全国で多発し大きな問題となったことから、報告会ではクマとの共存に焦点をあてた発表となったが、現地での研修では漁業と自然遺産観光との接点や摩擦について漁協でレクチャーを受け、また、漁業・水産物を観光資源として活かす試みについても知見を得ることができた。

また、実際に観光船に乗船することで、ヒグマが観光資源になっていることや、陸域と海域が一体となった生態系を構成していることを実感することができた。



オーロラ号

学生研修記

根田 悠成
地域経済学科 2年
滝川西高校出身



野生生物との共生の難しさ

今回の地域研修では、知床に行ってきました。2005年に世界自然遺産に指定された知床国立公園では主にヒグマ問題や漁業の問題について学んできました。400～500頭のヒグマが生息するヒグマが市街地に降りてきてしまうという問題が起こっていました。

エサ不足やクマが人間に対する恐怖心が薄くなっているのが主な原因となっており、これは知床だけでなく全国的にも問題となっています。

クマについて学ぶことができる知床センターでは、クマと遭遇してしまった場合の対処法や知床国立公園で作られているルールについて学びました。

そして、クマと共存していくためには駆除だけではなく、変化し続ける環境に応じた対応を模索していく必要があると思いました。

また、漁業についてウトク漁協の方々に教えてもらいました。そこでは、当時知床が世界自然遺産になったことによる観光客の増加によって、漁業に使う網などを勝手に踏んでしまい破損してしまったり、観光客が立ち入り禁止区域に勝手に入ってしまうなどの問題があったことを学びました。世界自然遺産に登録されたのと聞くと良いイメージを持つが、その裏にはいろんな問題が起こっていることが学びました。

藤井 翔平
地域経済学科 2年
とわの森三愛高校出身



野生生物の保護と共存

今回私たちのゼミでは、世界自然遺産にも指定されている知床に行ってきました。そこで私たちは世界遺産に登録された事による漁業の影響や、ヒグマの問題について学んできました。世界遺産に登録されたことによる漁業の影響はウトク漁協の方々に教えていただきました。

漁業の影響を受けているのは羅臼側の地区です。トドが網を壊して網の中にある魚を食べ荒らすという被害がでているが、トドは絶滅危惧種に指定されているので安易に駆除出来ないのが問題となっています。

ヒグマの問題については、知床センターということで映像を見てヒグマの問題について学んで来ました。その映像では、道路近くに出てきた野生のヒグマを見るために路上駐車し、車を降りてしまうことにより渋滞が起き、クマに襲われる危険と隣合わせの渋滞を解消するための取り組みの様子を見ました。人間が野生動物の脅威を甘く見ているのが原因でこのような事が起き、熊側も人間を脅威となる存在だと思わなくなっています。クマには絶対に近づかないと共に、そもそも遭遇しないようにすることが大事だと思いました。

クマと共存していくために、今までの対策だけではなく変化した環境に応じた対応を模索する必要があると思いました。

1部 水野邦彦ゼミ I・II

参加学生数 20名



水野 邦彦
地域経済学科
教授



宿泊施設・幌加内町ふれあいの家「まどか」にて

朝鮮人強制労働の痕跡を訪ねる研修

研修地：幌加内町朱鞠内

●研修目的

北海道内でおこなわれた朝鮮人強制労働の痕跡が比較的良好に残っているのが朱鞠内である。朱鞠内でのダム工事現場をはじめ、犠牲者が運びこまれた寺の跡地、遺体が埋められた共同墓地などを訪ねて歩く。

研修先・日程

- 9月3日 笹の墓標展示館(旧光顕寺)跡地 共同墓地(*笹の墓標。)
- 9月4日 朱鞠内湖畔 雨竜ダム(内部も見学) そば打ち体験(「まどか」にて)

写真①②③雨竜ダム見学。④土木学会選奨土木遺産に認定。⑤⑥⑦そば打ち体験。



●総括

朱鞠内では名雨線鉄道工事につづき1939年から朱鞠内湖の雨竜ダム建設工事がおこなわれた。ダム工事には常時2000人、最大7000人、延べ600万人の労働者がかかわり、その平均年齢は30歳であったという。ここには朝鮮人も大量に投入され、判明分だけで日本人168人、朝鮮人45人、計213人が死亡したとされるが、朝鮮人死亡者数はいまだ不明確。「高所から落ちてそのままコンクリートで埋めこまれた朝鮮人がいた」「湖の底にどれだけの人が埋まっているかわからない」との証言あり。朝鮮人犠牲者の遺体はいったん光顕寺(のちの「笹の墓標展示館」)に運びこまれたのち、多くは林のなかに埋められ、だれがどこに埋まっているのか不明であったが、近年、遺骨の発掘と返還がつけられてきた。

研修では、ダム工事の現場であった雨竜第一ダムを訪れ、北電職員のかたに説明いただきつつダム上部と内部を見学した。

研修一行は、かつての小学校校舎を改造した宿泊施設「まどか」に泊まり、夜はバーベキュー、翌朝は、そば生産量日本一を誇る幌加内町のそば粉を用いたそば打ちを体験した。

学生研修記

木下 滉大
地域経済学科2年
札幌清田高校出身



悲惨な強制労働の歴史を伝えること

研修の目的は、かつての朝鮮人労働者の置かれた過酷な労働環境を知り、いま私たちにできることは何なのかを考えることであった。

朱鞠内の林のなかにある「共同墓地」では、朝鮮式の墓と追悼碑を目にしたが、どのような労働を強いられて犠牲になったのか追悼碑につづられていた。

戦時下の雨竜ダム工事に携わって命を落とした朝鮮人は、林の中にただ埋められるだけという共同墓地に眠っており、戦後しばらく顧みられることがなかったようだ。朝鮮式の墓を見るのは初めてだったが、この共同墓地は2001年のワークショップに参加した若者によってかなり整備されたという。

身元がいまだに特定されない遺骨、いまなおどこに眠っているかわからない遺骨もあるようで、犠牲者とその家族を思うと胸が痛くなった。このような強制労働の犠牲者の悲惨を後世に伝えるとともに、同じことを二度と繰り返さないことが、いま生きている私たちの役目であると痛感した。

高橋 諒成
地域経済学科3年
滝川西高校出身



ただ埋められたタコ部屋労働者

朱鞠内湖に雨竜ダムを造る大規模工事が戦前戦中に行われ、そこに朝鮮出身者を含む数千人の労働者が強制労働を強いられていた。ぎゅうぎゅう詰めの宿舎など、その生活・労働環境はタコ部屋と呼ばれ、亡くなった朝鮮人の多くは林の中にただ埋められた。その遺骨が発掘されたり、近くの光顕寺内で骨がみつかったりしたのは、数十年も後のことだった。遺骨が眠る山中には墓も墓標もなく、ただ笹が墓標代わりだったという。

光顕寺は「笹の墓標展示館」として強制労働調査の拠点になったが、2019年の豪雪で傾き、解体を余儀なくされた。いま巡回展が行われるとともに、募金によって展示館の再建が目指されている。

幌加内町はそば生産量日本一の町でもあり、研修ではそば打ちを体験した。ふだん自炊しているので自信はあり、そば粉と小麦粉に水を加えながら混ぜるのはうまくいったが、次の「丸出し」や「四つ出し」では力加減が難しく、厚みにムラがでたり、ちぎれたりした。



1部 水野谷武志ゼミ I・II

参加学生数 20名



水野谷 武志
地域経済学科
教授



取材に応じてくれた旭山動物園職員を囲んで

食品ロス削減の現状と課題—旭川市の事例をふまえて

研修地：旭川市

●研修目的

日本は食料の6割以上を外国から輸入し、その輸送で大量のエネルギーを消費しながら、年間に約600万トンの食品ロスを生み出すという深刻な矛盾を抱えている。そのような食品ロスの現状とその削減に向けた課題について旭川市の事例を通して考える。

研修先・日程

- 8月28日 旭山動物園、NPO法人ピースーズ
- 8月29日 旭川市役所（旭川市クリーンセンターにて講演・意見交換会）、旭川フードデザイン研究所
- 8月30日 層雲峡観光後に帰札

写真①旭山動物園を楽しむ。②ピースーズの理事長を囲んで。③旭川市役所職員を囲んで。④旭川フードデザイン研究所職員を囲んで。⑤旭川フードデザイン研究所での工場見学。⑥層雲峡の宿で夕食。⑦層雲峡の名所「双雄台」。



佐藤 綸太郎
地域経済学科2年
北海高校出身



柏崎 未空
地域経済学科3年
札幌藻岩高校出身



●総括

旭山動物園では、地元農家から出る規格外農産物を動物の餌として受け入れることによって食品ロス削減に貢献しているが、それは動物園が取り組む様々な環境保全活動の一部に過ぎないことがわかった。市内でフードバンク活動を展開するピースーズでは、食品の回収・仕分け・配達などの作業に障害者が関わっており、食品ロス削減と障害者就労支援を組み合わせていることがわかった。旭川市役所では、全道でも先駆的な「食品ロス削減推進計画」を2023年3月に策定したばかりで、4つの基本方針にもとづいて食品ロス削減をさらに推進しようとしていることがわかった。旭川フードデザイン研究所では、地域の農水産物が店舗に届くまでに発生する様々な未利用食材を新しい素材に加工する高い技術力があることがわかった。

旭川市の事例を通して、食品ロス削減は多様な主体による多面的な取り組みの結果として実現するものであることが理解できた。その上で今後の課題の1つとしては、主体間の協力・連携をさらに進めることであると感じた。



旭山動物園を楽しむ

学生研修記

旭川市の食品ロス削減

今回私たちは食品ロス削減の現状と取り組みというテーマをもとに旭川市で2泊3日の研修を行いました。

旭川市では、旭川市役所、旭山動物園、ピースーズ、旭川フードデザイン研究所の方々に取材を協力して頂きました。旭川フードデザイン研究所では講演を受け質疑応答の後、工場見学をさせて頂きました。ここでは「地球食」という地球の恵みを無駄なく調理加工して人気な商品を日々開発しています。工場見学では自社で生産しているオリジナルの機械が実際に稼働しているところなど見る事ができました。取材では常にお客さんを第一に考えられていて、私たちに寄り添ってくれる身近な企業であると感じました。

今回の研修を通して食品ロスを完全に無くすのは難しいかもしれないが、減らしていく活動が地域活性化に繋がったり企業の認知度や売り上げの向上になるということがわかりました。

食品ロスの考え方—旭山動物園

私たちは食品ロス削減の現状を知り、新しい取り組みを考えるために、旭川市を訪れました。研修で取材させていただいた中の1つである旭山動物園では、余った食材を提供して下さる方から全てを引き受けるのではなく、必要な分のみ受け取っていることを知りました。予め動物たちに与える量が決まっており、必要な分はすでに発注されています。そのため、食料を受け取ることは普段与えている餌にプラスで与えることになります。職員は動物たちのため食材の品質や与える量、体重管理、必要な栄養素なのかを十分に考え食材を受け取るかを判断していました。動物の健康を第一に考えつつ、必要な分だけ受け取る事で、新たな食品ロスを生まないように心がけていました。私はこの考え方が本当の食品ロス削減に繋がると感じました。直接お伺いすることで、動物たちの生態や育っている環境、職員の動物への真剣さを実感し、食品ロスに対する理解が深まりました。

2部 水野谷武志ゼミⅡ

参加学生数 1名



水野谷 武志

地域経済学科
教授



釧路町役場職員に向けた研修成果発表

津波避難場所における収容人数の検証

研修地：釧路町

●研修目的

北海道太平洋沿岸では巨大地震が起きた場合に深刻な津波浸水被害が想定されているが、釧路町は沿岸部よりも釧路川を遡上した内陸平野部のセチリ太地域に人口が集中している。そこで、セチリ太地域の津波避難場所における避難者数の収容能力を検証する。

研修先・日程

- 8月22日 釧路町役場職員との事前打ち合わせ (釧路町役場)
- 8月23日 釧路町セチリ太地域の津波避難場所を巡回
釧路町役場職員に向けた研修成果発表 (釧路町役場)
釧路湿原国立公園・細岡展望台
- 8月24日 釧路町沿岸部を視察後に帰札

写真①津波避難場所 (イオン釧路店駐車場)。②津波避難場所サイン (シティーホール釧路北)。③津波避難場所 (マルハン木場店駐車場)。④研修成果発表会 (釧路町役場)。⑤発表を終えてホットするゼミ生 (役場前)。⑥釧路湿原国立公園・細岡展望台。⑦釧路町沿岸部視察 (来止臥 [キトウシ] 野営場)。



①



②



③



④



津波避難タワー建設予定地 (中国公園)



図1 セチリ太地域推計避難者数マップ ※QRコードからwebで閲覧できます。

学生研修記

津波からの避難について

私の研修テーマは、釧路町セチリ太地域における津波避難場所への避難者数の推計でした。津波避難場所には、どのくらいの人数が避難してくる可能性があるかを地域研修前にArcGIS Proというソフトを使い計算し、マップを作成しました。地域研修では、実際の避難場所の視察や釧路町職員に向けて作成したマップを交えながら研修テーマで発表しました。



有田 幸平

地域経済学科3年
北海学園札幌高校出身

釧路町は海沿いの町であり、セチリ太地域は大きな津波被害を受ける可能性があるとして、町でも津波からの避難の方法を考えていました。それは、分散避難という方法であり避難する場所をあらかじめ決めることにより、避難場所が避難者であふれることなく避難させることができるというものです。しかし、分散避難計画上よりも多くの避難者が避難場所に来た場合、どのような対応を行うかが気になりました。

日本は津波が多く発生する国なので、ほかの自治体でもこのような避難計画が立てられているかについて今後さらに比較・検討してみようと思いました。



⑤



⑥



⑦

1 部 宮入隆ゼミ I・II

参加学生数 23 名



宮入 隆
地域経済学科
教授



本別町役場での集合写真

大規模畑作経営の現状とこれから

研修地：本別町

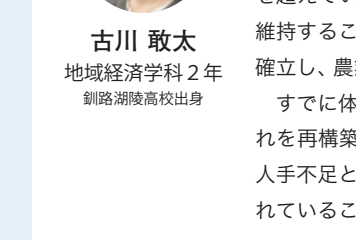
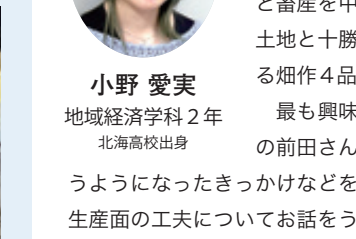
●研修目的

ポストコロナの市場環境の変化や円安による資材高騰など、農業経営が新たな対応を求められている現状を鑑み、大規模畑作経営の集積地である十勝農業がどのような展開を見せているのか、自治体、農協、農業者を中心とした実態調査から明らかにすることを目的とした。

研修先・日程

8月23日	本別町農林課
8月24日	JA本別町農産センター 渋谷醸造株式会社
8月25日	前田農産食品株式会社（農業者） 道の駅 ステラ★ほんべつ

写真①JA本別町の農業倉庫にて。②前田農産食品のポップコーン圃場にて。③前田農産食品の小麦乾燥調整施設にて。④道の駅 ステラ★ほんべつでの集合写真。⑤十勝名物豚丼で昼食。⑥JA本別町農産センターでの座学研修。⑦宿泊施設での夕食パーティー。



●総括

本別町は古くから道東地域の交通の要所として栄え、利別川流域の優等地を中心に基幹産業として農業が発展してきた。金時や高級菜豆の生産が盛んだったこともあり、1990年代以降は「豆のまち」としても有名である。

本別町の経営規模は2000年代初めには平均27haほどだったが、2022年現在では41.3haまで拡大した。規模拡大はそのまま労働力不足へと結びつき、従来の畑作4品による輪作にも影響を与えている。個別経営は機械化による省力化を実現しやすい小麦や豆類の作付けを維持する一方で、馬鈴薯やてん菜の作付けは減少している。さらに畜産経営は飼養頭数を拡大し、土地利用ではいまや飼料作物の作付面積がトップとなっている。

研修でお世話になった農業者の前田農産食品は、地域の平均を大きく超える140ha規模で小麦やポップコーン専用トウキビの生産を行いつつ、加工・販売までの一貫経営を行っている。季節雇用から通年雇用への切り替えによる労働力の安定的確保の面でもポップコーンの加工事業が重要であった。また小麦の秋まきと春まきを交互作付けすることで、輪作と同様に連作障害の回避に繋がるといった考え方も、規模拡大に合わせた輪作体系の再構築に向けた検討の材料となるであろう。

学生研修記

農業者の思いを直接聞ける嬉しさ



小野 愛実
地域経済学科 2年
北海道出身

本別町は帯広市と釧路市の中間に位置し、面積の半分以上が山林に覆われた緑が美しい自然豊かな町です。かつては林業も盛んでしたが、現在は良質な豆を特産とした畑作と畜産を中心とした、農業が基幹産業の町となっています。本別町の畑作農業は広大な土地と十勝特有の寒暖差を活かして、特産品の豆のほか、小麦、てん菜、馬鈴薯のいわゆる畑作4品目を中心としています。

最も興味深かった研修先は、農業者調査で訪れた前田農産食品株式会社です。経営主の前田さんの地域農業や消費者・実需者に対する思い、ご自身で加工から販売までを担うようになったきっかけなどを聞くことができ感銘を受けました。広大なポップコーン専用のトウキビ畑で生産面の工夫についてお話をうかがい、ポップコーンを製造する加工場を実際に目にすることができたことも嬉しかったです。今回の研修を通して北海道農業についてさらに詳しく調べたいという意欲が高まりました。

現状に適した新たな生産方式追求の重要性



古川 敬太
地域経済学科 2年
釧路湖陵高校出身

今年度、私たちは本別町を事例に大規模畑作経営の現状と課題について調査しました。研修全体を通して、私は現在の農業経営に適した生産方式を再検討していくことの重要性を実感しました。例えば、本別町では急激に規模拡大が進み、現在では平均で40haを超えています。労働力が不足するなかで、ここまで大きくなると、従来の4品輪作を維持することは困難であることを知りました。そのため、いかにして新たな輪作体系を確立し、農業や地域そのものを守っていくか、考える必要があるのです。

すでに体系化された生産方法や考え方を変えることは容易ではありません。私は、それを再構築していくことにチャレンジしている現場の皆さんをみて感銘を受けました。人手不足と輪作体系の再構築について、本別町だけではなく、全道で様々な試みが行われていることも分かりました。このような動向について今後も注目していきたいです。

2部 宮入隆ゼミ I・II

参加学生数7名



宮入 隆
地域経済学科
教授



高橋農場での集合写真

北海道稲作の現状と米販売戦略の方向 — 上川中央部を事例に —

研修地：旭川市・鷹栖町

●研修目的

北海道内最大の良食味米産地として存立する上川中央部を事例に、JAグループおよび農業者の生産・集荷に関する実態調査から北海道稲作の現状と課題を明らかにし、さらに特定米穀を扱う産地業者への調査を踏まえて、今後の道産米の生産・販売戦略の方向性を検討する。

研修先・日程

8月29日	上川ライスターミナル株式会社 JAたいせつ営農部
8月30日	高橋農場（鷹栖町） 株式会社高橋商事

●総括

上川中央部の農協は、ホクレンと共同出資して設立した上川ライスターミナルの施設を拠点に良食味米の広域産地として存立している。品種構成を集荷量割合でみれば、上川中央部は北海道が誇る超良食味品種‘ゆめぴりか’の割合が6割を超えている。全道の‘ゆめぴりか’の割合は3割弱であることから、この地域が良食味米生産に重点を置いていることがわかる。事例のJAたいせつはそこまで‘ゆめぴりか’に特化しておらず、地域の土地条件なども勘案しながら、オールラウンダーの‘ななつぼし’をメインに、業務用米として根強い人気を誇る‘さらら397’などがバランス良く生産され、米の総合産地といった様相である。

研修で得た知見を基に学生たちは以下のとおり結論づけた。第1に、北海道は全国有数の米どころとして存立し、生産者段階での多品種生産、そして農協集荷段階での高品質仕分けなどで、きめ細やかに生食用・業務用・加工用といった各実需の多様なニーズに対応してきたことが最大の強みである。第2に、主食用需要が減少することを前提に、従来の延長戦上ではあるが、輸出事業のみならず、今後は機能性食品の原料など特殊需要の開拓も視野に入れるべきである。

学生研修記

写真①上川ライスターミナルでの集合写真。②JAたいせつでの座学研修。③JAたいせつ田んぼアート2023。④高橋農場で自動操舵トラクターの見学。⑤高橋農場での研修。⑥高橋商事の工場見学。⑦高橋商事さんとの懇親会。



石村 向
地域経済学 2年
札幌大谷高校出身



岡田 将英
地域経済学 2年
札幌創成高校出身

私たちが考えた道産米販売戦略の課題と方向

研修で調査した高橋商事は、特定米穀（規格外米・くず米）という選別の際に一定の基準に満たさなかった米の集荷・加工・販売を専門に行っている会社です。この会社の特徴は2点あります。第1にホクレン・農協を中心に全道各地から集荷できる圧倒的な調達力、第2に色彩選別機を多面的に活用した圧倒的な選別・商品化の能力です。これらの特徴を最大限に生かし、多種多様な商品を作り、多様なニーズに応えていました。良食味米産地として存立している上川中央部の農協は、高位平準化された商品を作り出すために高度な選別を行い、その結果として規格外米なども多く発生します。だからこそ高橋商事のような企業が存在していることが重要で、企業活動自体が産地貢献であるといえます。

このような事例を通して、多品種による多様なニーズに合わせた米づくりはもちろん、健康志向に応える特殊需要の開拓など新たな販路開拓が必須条件であると考えました。

調査を通して知った稲作経営の実際

私たちのゼミは、「北海道稲作の現状と米販売戦略の方向」をテーマに上川中央部で研修を行いました。農家調査で事例とした高橋農場は、水稲作に特化した経営をしており、転作対応も水稲で行っているのが特徴的でした。販売面では、全量農協出荷での商品化で、農協が各需要の変化に合わせて出荷先を選択したことでコロナ禍の影響は受けずに済んでいました。それでも、円安/物価高の影響は強く受け、飼料や肥料の高騰により所得率が大きく減少し、調査を通じて稲作経営の厳しさも知ることができました。圃場条件があまり良くないと、単価の高い‘ゆめぴりか’の生産が限られてしまうということも知りました。‘ななつぼし’や‘さらら397’の単価は低いとしても、経営規模を拡大して対応している状況です。

今回の研修を終えて、日本人の米消費量が減少している現在では、稲作は主食用以外の需要に対応した米作りが求められているのだと実感しました。



1部 山田誠治ゼミ I

参加学生数 19名



山田 誠治
地域経済学科
教授



サラパーク前にて。役場の皆さんにはお世話になりました

更別村スーパービレッジ政策の課題の調査

研修地：更別村

●研修目的

ゼミの学習テーマである「デジタル化」が地域に何をもたらしているか、の問題意識のもとに、更別村が国から認定された「スーパービレッジ構想」の実際について調査をし、着手しつつある現場に触れ、その内容や課題を探ることが目的である。

研修先・日程

9月18日 移動、さらべつカントリーパーク
9月19日 更別村役場、旧試験圃、サラパークホール

写真①更別村スマートビレッジの解説に聴き入る。
②SARAPARKで伝わる熱い解説。③いよいよロボットトラクターの実演。④操縦方法は、使いやすく。⑤ロボットトラクターに乗る前に解説を聴く。⑥みんなでさらべつカントリーパークでのキャンプ食事。⑦スーパービレッジ計画の説明を受ける。



●総括

調査は、主に更別村のスーパービレッジ構想推進室の担当の方からの政策の解説を受け、午後には農業への自動化施策であるドローンの農薬散布と自動化したトラクターの活用状況、その課題、そして、現場の見学を受けての役場からの解説、へと続いた。

事前に調べた印象とは違って、実際の政策の解説を聴くと、様々な課題があることに気づかされ、新たな発見もあった。「ひやくわくサービス」の経過、自動配送システム、ウェアラブルウォッチを始めとした健康プログラムの課題、など高齢化と過疎化が進む中でデジタル化の重要さと課題について再認識でき、積極的な取り組みがとても素晴らしい、という感想もあった。また、それだけに課題も多く、デジタル技術がどう地域に生かせるか、についていろいろ考えさせられたことも多くあった。

事前に質問を準備して役場に送っていたので、それに対する詳しい返答を整理して説明いただき、学生にとっては貴重な学びの場となったと思う。そして、解説の最後の更別村の主幹の方から、学生みんなに対し、DX化を含め新しい課題に果敢に挑んでほしいという、熱く強いメッセージは、胸に届いたと思われる。

学生研修記

デジタル化を進めている村に期待

山田ゼミはデジタル技術を活用した取り組みの調査のため、北海道の十勝地方にある更別村を訪れました。更別村は村民の暮らしをより豊かにするためにさまざまなデジタル技術を取り入れています。



和泉 翔大
地域経済学科2年
大麻高校出身

その代表的な例がドローンや無人トラクターです。更別村は農地面積が広く、高齢者の割合が高いため畑の管理が困難です。そのため、無人トラクターで畑を耕したり、ドローンで水を撒いたり、うまくデジタル技術を活用していました。ほかにも、ウェアラブルウォッチという着用者のバイタルデータを取得し、そのデータを5分おきに家族に送れる機会を村民に無料で配布しており、更別村がどれだけデジタル化に力を入れているかがうかがえます。しかし、高齢者にあまりデジタル化が浸透していないという問題もあり、今後の課題となってくると思います。更別村の積極的な姿勢はほかの市町村も見習うべきであり、更別村はデジタル化に成功した村として見本になると感じました。

デジタル化を進めている村に期待

山田ゼミは北海道十勝地方南部に位置する更別村を訪れました。更別村は近年、デジタル化に力を入れており、今回は農業用ドローンの無人飛行や、トラクターの無人運転を実際に見せていただきました。少子高齢化によって働き手の確保がますます難しくなっているため、この取り組みによって業務の効率化が可能となり、人手不足解消の解決の糸口になるのではないかと感じました。他にも家まで注文した商品運んでくれる自動配送ロボットや様々な身体データを取得することができるウェアラブルウォッチの紹介をしていただきました。こちらは乗り越えていかななくてはいけない問題がありましたが、もし、解決することができ、実用化を進めることができれば村全体の生活の質を上げることができると思いました。



若山 隼也
地域経済学科2年
札幌藻岩高校出身

このように更別村では興味深い取り組みが数多く行われており、成果をあげることができれば、先駆的なむらづくりとなるため、成功することを期待しています。



1部 山田誠治ゼミⅡ

参加学生数 14名



山田 誠治

地域経済学科
教授



京都 四条河原町にて

地域課題に対する DX化の実情と課題の調査

研修地：京都府京都市・大阪府枚方市

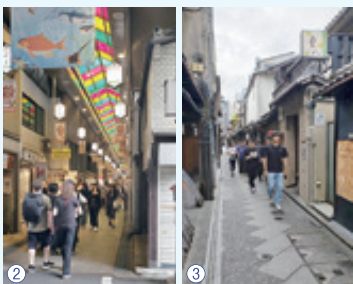
●研修目的

「デジタルを活用して地域を元気にする」をテーマに、調査対象として世界に冠たる京都の観光DXの取り組みと、全国に先駆け、子ども食堂にDXを取り入れた実証実験を行った枚方市を訪問し、その経緯や課題について学修することを目的とした。

研修先・日程

- 10月3日 市内観光スポットの見学
- 10月4日 京都市観光協会から観光DXの解説
清水寺、錦市場、祇園、河原町、八坂神社、
etc.で外国人アンケート調査
- 10月5日 枚方市役所で子ども食堂DXの実証実験
について解説
京都スマートシティエキスポ2023を見学

写真①夜の京都らしさを実感。②オーバーツーリズムで有名な錦市場。③北海道にはない先斗町街並みの見学。④京都市観光協会の入ったビルを前に。⑤八坂神社前で外国人へアンケート調査。⑥子ども食堂DXの実証実験の結果をくわしく解説。⑦枚方市長にもご挨拶。⑧京都スマートシティエキスポでも質問。



●総括

今回の研修では、世界に冠たる観光地である京都市に出向き、観光DXをある意味主導し、量質ともに非常に豊かな取り組みをされている京都市観光協会の取り組みについて調査してきた。特に公式ホームページの作成運営をめぐる様々な取り組みについて、非常に詳しく、またその経過と課題についても率直に紹介していただき、学生たちにとっては非常に大きい学びになったと思う。

また、京都の観光情報をどのように入手したか、についての外国人アンケートの取り組みでは、対面での聞き取りが強く印象に残ったようで、経験としても貴重な機会となったと思う。

また、枚方市の子ども食堂DXについては、実証実験の取り組み自体が非常にユニークで、かつその結果について、デジタルの活用には、人の問題を含め、いくつかの課題が明らかになったことを詳細に紹介してもらい、非常に有意義な研修になったと思う。

関西地域特有のざっくばらんな解説に接し、北海道とはまた違う空気の中で、現場の方々から実際のところを細かく聞いたことは、ただデジタルの範囲内でだけで知ることとは違う「知」があり、学生たちは多くのものを感じ、学び取った研修になったのではないかなと思う。

学生研修記

大阪で見た子ども食堂とDX化のリアル



伊藤 衣織

地域経済学科4年
札幌旭丘高校出身

私たちは今回の地域研修で、子ども食堂とDX化についてのお話を伺いに大阪府枚方市の市役所を訪れました。市役所は子ども食堂への食材の寄付の仲介を行っていましたが、子ども食堂の増加に伴って、作業の効率化が求められるようになったことから、DX化への取り組みが始まりました。民間企業も多く参加した巨大なプロジェクトを一から丁寧に説明していただき、DX化が完成するその過程を理解することが出来ました。また、このプロジェクトは現在ではもう使用されていないのですが、なぜ完璧に効率化したはずのシステムを現在も利用するに至らなかったのか、DX化を行うためには何が重要だったのか、運営側と利用者側の視点を深く考える、とても貴重な学びの機会となりました。

今後DX化と共に社会を支えていく私達にとって、忘れられない地域研修になったと感じています。

地域研修を通じて学んだこと



秋山 向太

地域経済学科3年
札幌新川高校出身

今回私たちは京都市観光協会を訪れました。観光協会を訪れるにあたり、事前のゼミ学習で考えた質問を京都市観光協会に文書で送りました。その質問に対して観光協会の方から熱心に回答をしていただいた中で、特に印象に残ったのはマーケティング戦略です。

顧客の購入金額や利用率のデータを元にターゲット層を分割し、個人に合わせたサービスを提供するといったDXを活用した戦略を実行していました。

そして、実際に京都を訪れている外国人観光客の方々に、京都観光ナビを知っているかや要望などについてのインタビューも行いました。様々な国の方々に話しかけるため、初めは不安や緊張を感じていましたが、多くの方がフレンドリーに接してくれたため充実したアンケートとなりました。こうした外国人とたくさんコミュニケーションをとる機会はこれまでなかったので、今回の地域研修を通じて新たな扉を開くことができたと実感しています。

2部 山田誠治ゼミ I・II

参加学生数 21 名



山田 誠治
地域経済学科
教授



このゼミ生の仲間

地域コネクテッドを目指すサツドラの 戦略を調査

研修地：札幌市

●研修目的

今回の調査は、デジタルを活用して地域を元気にする、というゼミのテーマのもと、いろいろ紆余曲折がありながら、地域コネクテッドビジネスというコンセプトで経営を展開しているサツドラを訪問し調査した。

研修先・日程

9月15日 サツドラホールディングスへ訪問・調査

写真①北海道とサツドラについての熱い語り。②これがサツドラの頭脳の部屋。③オープンで快適なスペースを活用。④サツドラの歴史と今も展示。⑤コンサドレとも連携して地域スポーツを支援。⑥店内施設の見学でコンセプトを理解。⑦利用中のコワーキングスペース。⑧“Hokkaido Happy”で飾られたスペース。



●総括

研修の訪問先に選んだサツドラは、北海道の高齢化と人口減少を睨みながら、AIやデジタル技術を様々に活用し、この課題に立ち向かう地域密着の経営戦略を展開しており、訪問見学でそのコンセプトの柱である地域コネクテッドビジネスを実際に体感できたのではないかと思います。カードを利用しながら地域住民とのつながりを生かし、そのインフラ化によって企業経営を展開しているということ、地域の社会貢献を睨んだ様々な取り組みをしていること、を学生たちは実際に話を聞き、学ぶことが多かったのではないかと。

実際に 江差町のカードの話聞いて、人口が少ない市町村にも地域の人たちと協力を築いている展開に関しては、学生たちも強い印象を持ったようだ。

単なる小売業を超えたこれらの取り組みについては、今後、道内志向の学生たちにとっても直面する課題でもある。若い担当の方が熱く学生向けに話をされ、店内の見学でも、ワーキングスペースや地域の交流を図る場を提供し、地域の人々をつなぐための色々な工夫がなされ、この企業のコンセプトが実際に展開されている様子を肌でも感じ取れる研修になったのではないかと思います。

学生研修記

吉田 龍信

地域経済学科 2年
石狩南高校出身



ドラッグストアの枠を超える

今回山田ゼミでは、サツドラホールディングスの本社を訪れた。人口減少や超高齢化社会をはじめとした様々な社会課題を抱えている北海道で、ドラッグストアから地域のヒト・モノ・コトをつなぎ、サツドラの経営理念である「健康で明るい社会の実現に貢献する」はそれを体現している。

北海道はこれから人口5000人以下の町が過半数以上になると言われ、5000人というボーダーラインを下回ると様々なサービスやビジネスが成立しなくなり、価値のあるものが道外に流出してしまうという。それを阻止するため、サツドラが経済圏をつくり、地域内で充実した暮らしをできるようにするのが地域コネクテッドビジネスという考え方でした。そのため、サツドラは、地域の企業や町村と連携することで資源や特色を活かしドラッグストアビジネスから地域コネクテッドビジネスへ。そして北海道だけでなく日本を変えていけるかもしれない取り組みだと思いました。

一戸 響

地域経済学科 3年
札幌英藍高校出身



サツドラの「地域コネクテッドビジネス」

DXによる地域の課題解決について学ぶ山田ゼミでは、「健康で明るい社会の実現に貢献する」という理念のもとドラッグストアビジネスを主体とし、近年はその域を超えて「地域コネクテッドビジネス」として北海道の課題解決に取り組むサツドラホールディングスの本社にて地域研修を行いました。

サツドラは基幹系システムの開発を自社で進めることでシステム開発の知識やスキルを蓄積し、その技術力によって消費者のニーズや社会情勢の変化、トップの意向等を事業へスピーディーに反映するマーケティングを行っています。また実験の場としてのドラッグストアを基に、北海道共通ポイントカードEZOCAや、それに対応した独自のPOSシステム等の開発も行い、エネルギーの開発や教育等の事業も行っており、いずれも技術を持って地域と協同することで事業を拡大している事が分かり、DXの活用や企業の在り方の具体的な一例を示していただきました。

地域研修報告会

2023年12月17日(日) 32番教室、33番教室、34番教室、40番教室、41番教室、42番教室、50番教室

2023年12月17日(日)に2023年度の地域研修報告会が実施されました。地域研修報告会は、本学経済学部の科目である「地域研修」の一環として行われるもので、現地研修から得た知見をまとめ、35グループが研修成果の報告を行いました。

ここ数年、コロナ禍により活動が制限されていた部分があり、地域研修も多少なりとも影響を受けていましたが、ついにコロナ禍が明け、やっと制約のない中で地域研修を実施することができました。コロナ禍での研修も学びの多いものでしたが、制約がなくなったことで、地域研修の幅はここ数年よりは拡がり、充実した研修になったと言えるでしょう。実際に、石碑に着目した調査、オーバーツーリズムや着地型観光等の観光に着目した研修など多種多様なテーマが見られ、調査手法に目を向けても、アンケート調査やヒアリング、現地企業の方による講演など、こちらも多種多様です。それぞれのゼミのカラーが表れたテーマや研修報告になっており、質疑応答も活発になされました。

自身が所属するゼミの地域研修のみならず、他のゼミの地域研修の内容に触れたことで、様々なテーマ・角度から地域を考える大変良い機会になったのではないかと思います。(藤田 知也)

◎報告ゼミ順序と研修地

【午前の部】 ●32番教室 [51名] 運営担当：浅妻先生

①佐藤信1部Ⅱ(札幌) ②上園1部Ⅰ(豊富) ③山田1部Ⅱ(京都府/京都・大阪府/枚方) ④古林1部Ⅱ(洞爺湖)

【午前の部】 ●33番教室 [48名] 運営担当：上園先生

①大貝1部Ⅱ(山形県/山形ほか) ②内田1部Ⅰ・Ⅱ(芽室) ③川村1部Ⅰ・Ⅱ(札幌) ④藤田1部Ⅰ(京都府/京都・亀岡)

【午前の部】 ●34番教室 [46名] 運営担当：内田先生

①藤田1部Ⅱ(石狩) ②上園2部Ⅰ・Ⅱ(余市) ③大貝2部Ⅱ(北見ほか) ④水野1部Ⅰ・Ⅱ(幌加内/朱鞠内)

【午前の部】 ●40番教室 [59名] 運営担当：川村先生

①山田1部Ⅰ(更別) ②浅妻2部Ⅰ・Ⅱ(室蘭) ③古林1部Ⅰ(洞爺湖) ④西村2部Ⅰ・Ⅱ・濱田2部Ⅰ・Ⅱ(豊浦)

【午前の部】 ●41番教室 [68名] 運営担当：佐藤先生

①平野1部Ⅰ・Ⅱ(札幌) ②平野2部Ⅰ・Ⅱ(札幌) ③浅妻1部Ⅰ・Ⅱ(函館) ④大貝1部Ⅰ(浜中)

【午前の部】 ●42番教室 [68名] 運営担当：藤田先生

①川村1部Ⅰ・Ⅱ(札幌) ②内田2部Ⅰ・Ⅱ(網走) ③濱田1部Ⅰ・Ⅱ(沼田) ④山田2部Ⅰ・Ⅱ(札幌)

【午前の部】 ●50番教室 [58名] 運営担当：濱田先生

①水野谷1部Ⅰ・Ⅱ(旭川) ②佐藤1部Ⅰ(江別) ③宮入1部Ⅰ・Ⅱ(本別)

【午後の部】 ●32番教室 [41名] 運営担当：古林先生

①上園1部Ⅱ(ニセコ) ②西村1部Ⅰ・Ⅱ(大阪府/大阪・兵庫県/神戸) ③宮入2部Ⅰ・Ⅱ(旭川・鷹栖) ④牛久1部Ⅱ(釧路/阿寒)

【午後の部】 ●33番教室 [30名] 運営担当：牛久先生

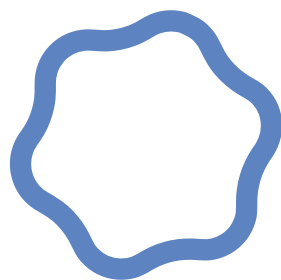
①古林2部Ⅰ・Ⅱ(斜里) ②藤田2部Ⅰ・Ⅱ(豊富) ③水野谷2部Ⅱ(釧路) ④西村1部Ⅰ・Ⅱ(浦幌)





北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2023



北海学園大学 経済学部

〔経済学科・地域経済学科〕

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL : (011) 841-1161 (内線2222)

<https://www.hgu.jp/>

<https://econ.hgu.jp/>

2024年3月発行

制作(株)ラボット